（H24.9.4第1版）

平成25年度企画
NOCSポッドキャスト・長崎歴史シリーズ

長崎の民話番外編

「郷土長崎の先人たち」

（全十話）

台本（要約版）

朗読：やまだ眸月真
原作　吉村佑一
「われらの長崎県　郷土の偉人」

企画・制作
長崎卸センターサービス株式会社

媒体：当社HP、当社スマートフォンアプリ、iTunes/Podcast

目　次

第一話	「本木昌造」「松田雅典」	配信予定	H25.09.02
第二話	「向井去来」「野口寧斎」	配信予定	H25.09.16
第三話	「楢林宗達」と「長与専斎」	配信予定	H25.09.30
第四話	「高島秋帆」	配信予定	H25.10.14
第五話	「マルコ・ドロ神父」	配信予定	H25.10.28
第六話	「芋を広げた人々」「松本四郎右衛門」	配信予定	H25.11.11
第七話	「二十六聖人」	配信予定	H25.11.25
第八話	「中山要右衛門」「有馬晴信」	配信予定	H25.12.09
第九話	「大村彦右衛門」「浜田謹吾」	配信予定	H25.12.23
第十話	「三浦按針」「雨森芳州」「賀島兵助」	配信予定	H26.01.06

Podcast「長崎の先人シリーズ」（朗読）

第１回　「印刷術の親　本木昌造」「日本缶詰の祖　松田雅典」

①タイトルコール
②前付解説
③趣旨説明
④読み手紹介
⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「印刷術の親　本木昌造」

わたしたちは、毎朝、新聞を読み、また、学校では教科書、家に帰ってからは、おもしろい本を読みふけりますが、これらの本の一字一字は、みな活字からできていることは、いうまでもありません。この活字を我が国ではじめて作ったのが、本木昌造（もときしょうぞう）先生です。

昌造は文政七年1824年長崎に生まれました。この町には、古くからオランダ人が出島に来ていたので、我が国の商人との間に取引をするときは、お互いの言葉の通訳が必要でした。この通訳する人を、オランダ通詞（つうじ）と言っていましたが、彼の家は代々このオランダ通詞だったのです。

そこで十二才になると、稽古通詞（けいこつうじ）になって、出島にかよいました。あるときのこと、自分に家にあった、オランダの活字で印刷した本を見て、

「これは立派な本だ、我が国の書物もこのように印刷できたら、どんなに立派で便利だろう」と思いました。その頃まで、我が国では、本は全て筆で書き写したり、木版刷りだったのです。

そこで出島に行ったとき、あるオランダ人に、このような見事な活字はどうしてできるのかと聞くと、その人は活字の発明家のラウレンス･ヤンコ･コリデルの伝記を貸してくれました。昌造はこの本を読んで、活字のことがよくわかったので、自分も一つ作ってみようと思い立ちました。まず、刀の目抜き（めぬき）の象眼（ぞうがん）をはずし、そのうえに、鉛を溶かしてみると、前の象眼（ぞうがん）と同じ形の鉛ができあがりました。昌造は「これだ・・・！」と、飛び上がって喜び、これと同じ方で、まず、カタカナ四八の活字を作り上げました。これが我が国ではじめて出来た「流し込み」活字であります。

それから、活字の地金（じがね）の組み合わせ方など、いろいろと苦労して調べて、自分の作った「蘭和通弁」（らんわつうべん）という本を印刷しました。オランダ人はこの本を見て「日本の活字で刷られた、立派な本だ」と、舌を巻いたということです。

安政元年1854年のことです。ロシアの使いのプチャーチンが、我が国と貿易の相談をするため、伊豆の下田に来ましたので、昌造は、長崎奉行の命令を受けて、通訳のため、下田に下りました。このとき、江戸の幕府からは、老中の阿部伊勢守（あべ・いせのかみ）がやってきました。真心を込めて、通訳をしたので、話はすらすらと進み、プチャーチンは感激して、立派な金時計を一つ昌造に送りました。

ところが、このペリーの乗っていた船が、付近の戸田浦で、浅瀬に乗り上げてしまったのです。そこでまた命ぜられて、その船の引き上げから修繕に立ち会うことになりました。このときに、西洋の汽船の作り方を詳しく調べました。これはかねてから、オランダの本を読んで、造船や航海の仕方などにも、関心をもっていたからです。

そののち、江戸に上ると、土佐の名君山内容堂（やまのうち・ようどう）は昌造のことを聞いて、「西洋の汽船の模型をぜひ作ってもらいたい」と頼みました。

容堂公は、自分の家来の後藤象二郎を、15代将軍の徳川慶喜（よしのぶ）公のところへやって、「日本の国を治める権力を、天子さま・天皇さまに返すように」と忠告させたほどの偉い人物でした。

昌造は早速作って献上しましたが、これが我が国でできた西洋汽船の初めてでありました。

昌造は、自分でも航海術の研究を始めました。おりよく、長崎の飽の浦（あくのうら）に製鉄所ができて、御用係を仰せつかりましたので、製鉄所用として、イギリスからビクトリア、チャールズの二艘の小蒸気船を買い込みました。そうして、自分から船長になって、近くの海を乗り回しました。

元治三年九月のことです。ビクトリア号に五〇人あまりの者を乗せ、江戸に向かっていましたが、途中遠州灘（えんしゅうなだ）で、大時化（おおしけ）に遇いました。船は木の葉のように波の上をさまよい、とうとう、伊豆七島（いず・しちとう）の南の八丈島（はちじょうじま）に流れ着いて、壊れてしまいました。

ここは赤い椿の花の咲く暖かな島でした。そこで、半年もその島にいましたが、その間に、島の人々に天然痘がはやっていることを知り、手当して治してやりました。長崎には前から種痘の仕方は行き渡っていましたので、昌造も、疱瘡（ほうそう）の治療法を、詳しく知っていたのです。

明治になって、東京へ上ったときも、参議（さんぎ）の大隈重信（おおくましげのぶ）に遇って、「日本近海の航海のための制海権は、我が国が持たねばなりません」と論じましたので、重信はあとで、「本木という男は、なかなか偉い人物だ。ただの通訳ではない」と褒めたそうです。

この間にも、我が国の活版印刷（かっぱんいんさつ）を進歩させることも決して忘れてはいませんでした。

明治二年1869年のことです。上海（しゃんはい）から、アメリカ人の活版技師ガンフルが、米国に帰る途中に、長崎に寄りましたので、この人に相談して、興善町に活字製造と、電気版の伝習所を作り、印刷界に明るい光を与えました。

また、明治四年には、横浜で我が国初めての日刊新聞「横浜毎日新聞」を始めました。東京の京橋に活版所も建てましたが、これが発展して築地活版所となったのであります。このように彼は、まったく、我が国の印刷術の育ての親でした。

また、ある時、郷土長崎の発展を忘れず、町の目抜き通りの浜町にかかっている橋が、木の橋で壊れかかっているのを見て、立派な鉄の橋に作り替えました。これは、我が国で一番はじめの鉄橋で、その頃、「長崎に過ぎたもの」として、町の人々の自慢の一つになったのです。

また、郷土の基礎を築く立派な人材を育てあげよう・・と、そのころ五万円という大金を出して、新町に、森町和塾という学校を作り、たくさんの人々を教育しました。

このように世の中のため骨身を削って働き続け、明治八年1875年九月三日、五二才でなくなりました。

諏訪公園の木々の緑の中に、全国の印刷業者の手による先生の銅像が、静かに町の発展を見守りながら建っています。また、大光寺（だいこうじ）の大楠ものとには、立派な墓がたっています。

「日本缶詰の祖　松田雅典（まさのり）」

トマトサージンといえば、鰯を缶詰にして売り出されているもので、長崎県の大事な産物の一つです。

また、茂木の枇杷や、伊木力（いきりき）のみかんも缶詰にされて、さかんに売り出されています。この缶詰を、我が国ではじめて工夫してこしらえたのが、松田雅典です。雅典は天保三年1832年に長崎に生まれました。父親は馬田永成（まだ・ながなり）という人でしたが、金屋町（かなやまち）の乙名（おとな）の松田というところに、養子に入ったのです。

若い頃から、何事でも自分の力でなしとげるという習慣を身につけていました。よいと思ったことは、かならず実行し、そのことで、人からいろいろと悪口を言われても、いっこうに構いませんでした。

その頃の長崎は、下駄はおもて付きがハイカラといって大流行（おおはやり）でしたが、雅典は上の桐の台のところはノミで削り取って履きました。これはいまの駒下駄の格好で、このほうがかえって丈夫で、履きよかったからです。

また、白足袋をはいたまま、ゴム底の靴を履いて歩きました。いまのオーバーシューズのようなものです。人々は、奇妙に思って、立ち止まって、眺めるものもありましたが、このほうが、軽くて足も疲れぬといって平気で歩いていきました。

このように西洋からはやってきたものには、なにごとでも、いちいち興味を向けましたが、特に、料理の方には詳しく、西洋料理屋の福屋には、自分で行って料理の仕方を教えていました。

明治二年頃のことです。今の県庁のところに広運館（こううんかん）という学校があって、ここでは外国人の教師がフランス語を教えていました。明治天皇に用いられた西園寺公望公（さいおんじ・きんもち・こう）も、一時、この学校で勉強したほどでした。

ここの教師に、ジュリーという人がありましたが、ある日、お弁当の時に、ピカピカひかる丸い箱のようなものを小刀で開いて、中から牛肉を出して食べています。

そばの腰掛けに掛けていて、これを見ていた雅典は、たちまち珍しがって、それについて尋ねました。

ジュリー先生は、これは缶詰というもので、フランス人のアツペールという人が、1804年にはじめて工夫して拵（こしら）えた物。缶の中空気を抜いてあるので、中に入っている食べ物は長く腐らぬようになっている、と教えました。

「これは重宝な物だ。どうかして、日本ででも作ってみたい」と、雅典は、青年のように目を輝かせました。もうこのときは四〇才を超えていたのです。

これから、缶詰を作ることに心を砕き始めました。そうして、あるときは、県の知事さんに会って、その必要を説いたこともありました。

こうして明治十七年になって、やっと工場をたてて作ることになりました。諏訪公園の入り口、県立美術館近く「日本缶詰発祥地」の碑が建っていますが、ここが工場のあったところです。

彼は毎日、この工場に寝泊まりして、缶詰を作りました。三度の食事ももとより、工場の中で食べました。むかし、ルーサー・バーバンクという人は、トゲのないサボテンをつくるために、毎日、温室のなかで寝泊まりして、育てたといいますが、これによく似ているではありませんか。

こうして明治三十七年になると、にわかにロシアとの間に大戦争が始まりました。我が国の兵隊さんは、汽船に乗って玄海をわたっていきました。その頃、兵隊さんの弁当のおかずは、日の丸弁当といって、梅干しの他はありませんでした。

そこで我が国政府は、雅典にたくさんの牛肉の缶詰を頼んできたのです。雅典は、非常に感激して、特によい物を安くで作って、満州に送りました。兵隊さんは、不自由な満州の野原でどれほどよろこんで食べたかしれません。明治三十八年、この用事で東京に上りましたが、帰って間もなく病気にかかり、なくなってしまいました。時に五月二六日。六四才でした。寺町の皓台寺の後ろの丘の上に墓がありますが、いまでも港を出て行く缶詰船を、懐かしげに眺めていることでしょう。

⑦やまだ眸月真の「つぶやき」コーナー
⑧ご協賛いただいた方のご紹介
⑨次回の案内
⑩エンディング

第二話　「俳人向井去来」「詩人野口寧斎」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「俳人　向井去来」

芭蕉から、俳諧「西国（さいごく）三三カ所奉行」と褒められ、芭蕉の一番大切な句集の「猿蓑集」を作り上げた向井去来は、承応（しょうおう）元年に、長崎の興善町に生まれました。

父親の元升（げんしょう）は「長崎聖堂」という儒学の大学校を東上町（ひがし・うわまち）に作った人です。これは、江戸の有名な昌平黌（しょうへいこう）よりも古く、我が国では一番はじめの大学でした。去来の幼い時の呼び名を平次郎（へいじろう）といいました。父親の元升（げんしょう）は偉い学者であったばかりでなく、また、立派な医者でもありました。あるとき、京都に上って、後水尾天皇（ごみずのおてんのう）さまのご病気を診て差し上げたのが、ご縁となり、宮中にも時々お伺いすることになったため、みんな京都に移ることになりました。そこで、平次郎もついて行くことになりました。これは八才のときでした。

そののち、平次郎は、叔父の久米諸左衛門（くめ・しょざえもん）という人が、筑前の黒田藩に仕えて、福岡にいましたので、しばらくその家に行って暮らしていました。その頃の平次郎は、なにさま剣道はもとより、馬に乗っても、弓を引いても上手で、軍学（ぐんがく）は、甲州流をわきまえていましたので、黒田の殿様からは、いくども自分の藩に仕えるように勧めました。しかし、平次郎は、その頃から、風流（ふうりゅう）に心を傾けていましたので、「きっぱり」それを断って、江戸の芭蕉に手紙をやり、その弟子にしてもらいました。ときに、彼の二六才のときのことです。そうして、俳号を去来と名乗りました。

去来は、京都の外れの嵐山に近いところに古ぼけた一軒の家を見つけて、住むことにしました。この家の庭には、四〇本も柿の木がありました。

かきぬしや　こずえはちかし　あらしやま（柿ぬしや、こずえは近し　嵐山）

と詠んでいます。

秋になると、赤い珊瑚のように実がなりました。あるとき通りがかった商人が、これをみて、「だんな、この柿を一貫文（いっかんもん）で売ってくださいませんか」といいました。

縁側に座っていた去来は、「ああ、いいよ」と肯きました。ところが、その夜、あいにく風が出て、柿はポトポト落ちて、枝ばかりになってしまいました。翌朝、車を引いてきた商人は、びっくり驚いて、「昨日お預けした一貫文を返してください」といいますと、去来は笑いながらまた、「いいよ」とうなづき、「そのかわり、これを持って行ってください」といって、京都の友達に手紙をことづけました。

このとき、手紙に自分の家のことを、「落柿舎」（らくししゃ）と書きました。柿の実が落ちた家ということです。これから彼の家のことを、誰ともなく、落柿舎と呼ぶようになったのであります。

付近には「保津川」も流れていて、春になると一面に麦畑になりました。

つかみあう　こどものたけや　むぎばたけ（掴み合う　子供の丈や　麦畑）

と詠んでいます。

これは、こおいらの子供の春の生活をうまく読み込んだものです。

師匠の芭蕉も、ときどき江戸からやってきて、ここへ泊まりました。去来はよろこんで、わざわざ、京都の町まで行って、芭蕉の好きな菓子や、酒などを買ってきて、もてなしました。

あるとき、芭蕉はここへ泊まっていたとき、不幸な弟子の杜国（ざこく）の夢を見て、泣いたことがありました。

この頃の長崎には、彼の弟で、長崎聖堂の先生の魯町（ろちょう）や、甥の卯七（うしち）、また、田上の田上寺（ただみでら）には、叔母の田上尼（たがみに）など、たくさんの俳人がいました。

そこで、彼は時々長崎へ下ってきて、俳句の会にも連なって、教えました。あるとき、卯七が、郷土の人々の俳句を集めて「渡り鳥集」を作ったときは、自分も加勢して、「故郷もいまは仮寝やわたり鳥」の句を、乗せたこともありました。

ちょうど、元禄二年にかえったときのことです。このときは、半年以上も滞在して、久しぶりにゆっくりと故郷の港を眺めました。そうして、いよいよ帰るときのことです。

その頃は、もとより日見トンネルはなかったので、人々は蛍茶屋から、日見の峠道を越えなければなりませんでした。たくさんの弟子たちが峠まで送ってきました。網場道（あばみち）まで下って、去来が峠の上を仰いでみると、銀の花のように揺らぐススキの中から、みんな手を振って別れを惜しんでいます。

君が手も　まじるなるべし　はなすすき

去来は、京都に帰ってから、この句を卯七に送ってやりました。十一月も末のことでした。この句は天明四年、石に刻まれて、峠の下に建てられました。これがいまの「芒塚」です。これは印材（いんざい）の形をした、珍しい句碑です。

芒塚は、秋になるとここいら一体にススキに覆われることはもとよりですが、また日見の桜で、春は花吹雪にもつつまれれるのです。

元禄七年芭蕉が旅行の途中、大阪の花屋で、倒れたとき、真っ先に駆けつけたのは、彼でした。そうして誰よりも熱心に介抱し、亡くなると、師匠がかねて願っていたように、近江の義仲寺（おうみのぎちゅうじ）に、手厚く葬ってやりました。

そうして、宝永（ほうえい）元年九月十日、自分も、芭蕉と同じ赤痢にかかって、なくなったのです。ときに五四才でありました。

「詩人野口寧斎（ねいさい）」

明治の頃、病の床についたまま、たくさんの人々に漢詩を教えて、その頃、日本一の漢詩人と歌われた野口寧斎（ねいさい）は、諫早の人です。これは、俳句の正岡子規がその半生を病に倒れたまま、病の床の中から、我が国の俳句や短歌をよくするために、いろいろの立派な仕事を成し遂げたのと並んで、有名です。

寧斎（ねいさい）は、明治の幕の切って落とされるすこし前の、慶応元年に生まれ、幼い頃の名前は、一太郎と呼んでいました。父親も名高い漢学者で詩人の野口松陽（しょうよう）でした。この人は、また諫早藩の医者だったので、はやくから江戸に出て役に就こうとすると、皆に止められましたが、よっと殿様のお許しを得て、江戸へ出ました。

そこで一太郎も五才のときから、東京へ住むことになったのです。まもなく麹町の番町小学校に入りましたが、勉強が大層よくできるというので、市長さんから褒美をもらったこともありました。

一太郎は、はじめ父親について、漢詩の手ほどきを受けていましたが、後には哲学館にはいって、歴史や漢学を学びました。

その頃、政治評論を雑誌に発表しますと、そのきびきびした文章は、たちまち、世間の評判になりました。

いつも故郷のことを忘れず、ときどき諫早にやってきましたが、二十二、二十三才の時のことでした。ちょうど帰ってきたとき、鶴鳴会（かくめいかい）という会があって、いろいろの意見が郷土の青年たちによって、述べられていました。黙って聞いていた彼は、突然、演壇に飛び出していって、人々の議論の間違っていることを、糺（ただ）しました。彼はこのように激しい気性でした。

二十六才のとき、三体詩という難しい中国の詩集を解説した三体詩詳解（さんたいし・しょうかい）という本を出版しました。これはいかにも立派にできていたので、世間の評判になりましたが、自分では、

「本を書くのは、長い年月かかるのに、こんなに年若くして出したのは恥ずかしい。しかし、年取った母親にお目にかけれたことはうれしい」と言いました。

この本が出てから間もなく病気にかかって、床につくことになったのです。

彼は病気になってよく考えて、自分に天分は誌にあることを悟りました。そこで、「百花園（ひゃっかえん）」という誌の雑誌を作りました。これは我が国全体から集まった詩のうちから、毎号一人一篇百人の作を載せることにしました。

ちょうど、明治三十七年の日露戦争が始まろうとする、国民の意気が虹のように高まっていた頃なので、みなあらそって百花園に詩を寄せたのです。

この中には、大政治家の伊藤博文は、「春畝山人」（しゅんぽ・さんじん）の名で、山県有朋は「含雪山人」（がんせつさんじん）として出し、一代の実業家であった渋沢栄一は、「青淵釣夫」（せいえんちょうふ）の名で詩を出しています。このように、偉い人々がみな弟子となって、世の詩を作ったのです。

妹のソヨさんは、いつも枕元を離れず、世話していました。このことは正岡子規の妹さんが、嫁にもいかず病床の世話したのとともに、語り草になりました。

旅順口（りょじゅんこう）攻撃の乃木将軍も「石林孤樵」（せきりんこしょう）の名で、「百花園」に詩を出していましたが、いよいよ満州に出征するとき、忙しい時間をさいて、この病詩人の家を訪れました。

そうして戦地から金州の地に一子を亡くした、かの血を吐く思いの、「金州城外」の詩や、軍人の働きをたたえた・・・

にれいさんのけん　よづるにかたし　だんしせいちゅう　ひゃくなんにたう
てっけつやまをおおい　さんこつあらわなり　まんにんひとしく　あおぐにれいさん

の爾霊山の詩を送ったのです。

皇后陛下は、あるときお菓子を賜ってお見舞いになりました。このときは感激のあまり、一詩を作って差し上げました。このように一世（いっせい）の尊敬と親愛を集めて、明治三十八年五月十二日、三十九才で麹町の六番町でなくなりました。

第三話　「楢林宗達（ならばやし・そうたつ）」「長与専斎」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「楢林宗達」

子供のころ、どこかの時点で、腕に種痘（しゅとう）をしたことがあると思います。

これは、おそろしい天然痘という熱病にかからないためにするものです。昔は、この病（やまい）が大層はやって、死ぬ者の十人のうち、一人は必ず、この病だったというありさまでした。

我が国でも、古く崇神天皇（すじんてんのう）さまはじめ五人の天皇が、この病でおなくなりになったといわれています。

「どうかしてこの恐ろしい病気を治す方法はないものか？」と、初めてこのことについて、心を砕き始めたのが、イギリスのエドワード･ジェンナーです。その頃まで行われていた、疱瘡（ほうそう）の治療法は、大層、野蛮なやり方でした。

彼はあるとき、牛痘（ぎゅうとう・牛のほうそう）に一度かかった者は、天然痘にはかからぬそうだ・・・と、牧場の乳搾りの言った言葉を小耳にはさみ、これから、いろいろ工夫して、牛痘のためを人の腕に植える「植え疱瘡」のやり方に成功しました。これが、じつに1796年のことでした。

このやり方は、たちまちの間に、ヨーロッパの国中に広がりました。ジェンナーのこの発明に遅れること五〇年、我が国にこのやり方を導入して、世の中に広めたのが、楢林宗達（ならばやしそうたつ）でした。

彼は享和（きょうわ）二年二月二日、長崎に生まれました。父親の栄哲（えいてつ）も医者で、町に病院を開き、かたわら、佐賀の鍋島公の侍医（じい）をしていました。そこで、宗達（そうたつ）も、後には、父の跡を継ぎ、鍋島藩にも仕えることになりました。

文政六年のことです。かの有名なドイツ人のシーボルト先生が、出島にやってきました。シーボルトは西洋医学の技術に優れていましたが、その頃の外国人は、出島から一歩も外にでることは出来ませんでした。

そこで宗達たちは、町年寄の高島四郎兵衛（たかしましろうひょうえ）から、長崎奉行に願い出てもらい、二日に一度、宗達の家に来てもらい、病人を診てもらうことにしました。その日は、足の踏み場もないほど患者が押しかけました。

もとより、我が国人も、役人のほかは、出島へ入ることができませんでした。そこで、宗達は「どうかしてオランダ屋敷へ入り込みたいものだ」と心を砕いていましたが、とうとう「オランダ人の病気を診察する」ということにして、出島橋を渡ることができました。これは鍋島閑叟（かんそう）公に頼まれて、外国事情を調べるためでありました。

彼はオランダ屋敷で、航海、舎密（写真）、兵学、医学の書物をたくさん手に入れて、閑叟公に献上しました。

佐賀藩がいち早く開国を唱え、明治維新の時は、薩長土肥といわれ、薩摩や、長州などとともに、際だった働きをしたのは、このことがもとになったのです。

シーボルトは、我が国に来るとき、種痘の種をもってきました。そして、カピタンについて、江戸へ上ったとき、向こうで植えてみましたが、種が古かったとみえて失敗しました。宗達はこの頃から、シーボルトに聞いて種痘のやり方を、調べ始めたのです。

その後、大村町に大成館（たいせいかん）という塾を建てて、たくさんの弟子を養い始めました。この頃、幸い種痘の大家のモーニッケが、出島にやってきたので、宗達は、早速、これについて研究を始めました。モーニッケも、種をもって来ましたが、これも船中で古くなっていたものか、上手くいきませんでした。

弘化（こうか）四年になって、佐賀藩には、疱瘡が大流行して、たくさんの死人もでてきました。閑叟公は宗達を佐賀に呼び寄せて、「どうか、植え疱瘡を早くやるようにしてもらいたい」と、頼みました。宗達はこのことを早速モーニッケに相談しました。

六月に入って、長崎港に入ってきた、オランダ船は、待ちに待った種痘の種をもってきました。宗達は、この種をまず、「子供の健二郎に植えてみよう」と思いました。健二郎はまだわずか二歳の赤ん坊だったのです。

もとより、出島には入れなかったので、自分の子供の病気をモーニッケに診てもらうから・・・と願い出てやっと許され、乳母に健二郎を抱かせて、出島に入り込みました。そうして、健二郎に植えてもらったのです。二～三日して、餅のように肥えた健二郎の腕をみてみると、見事に赤いつぶつぶが現れています。「しめた！　成功した。疱瘡が植わった」と、宗達は、飛び上がるほど喜びました。

早速健二郎を抱いて、佐賀に向かったのです。

閑叟公はお付きの医者の佐野寿仙（さのじゅせん）など立ち会いのうえ、自分の世継ぎの淳一郎と、貢姫（こうひめ）に植えさせました。すると、どちらも見事に植わったのです。宗達はこれに力づけられて、鍋島の藩内をくまなく廻って、種痘を施しました。

あれほど激しかった藩内の天然痘も、次第に下火になってきました。宗達はたくさんの褒美と、着物をいただいて、長崎へ帰ってきたのでした。

しかし、長崎では「種痘を植えると身体が牛になる」とか、「もう～もう～鳴き出すようになる」などいって、逃げ出す始末でした。

そこで、宗達はモーニッケについて学んだことをもとにして、種痘の理屈や効能を詳しく記した「牛痘小考

」（ぎゅうとう・しょうこう）という本を書いて、あちこちに配りました。

そのほか、自分の苦心して作った種を、唐津、大村、平戸、久留米をはじめ、江戸や京都までも送ってやりました。

こうして、種痘は、しだいに我が国中に広まっていったのです。嘉永（かえい）五年一〇月六日、五一才でなくなりました。銭座町の聖徳寺の丘の上に、そのお墓がたっています。

「 長与俊達（しゅんたつ）と長与専斎（せんさい）」

「一枚の羽織」

大村市の片町には、うつくしい大村湾の町の浦にも近く、宣雨宣晴亭（ぎうぎせいてい）跡が、家も昔のままで残っています。ここは 長与俊達と、その孫の専斎先生がお住み

になったところで、庭の隅には「長与専斎」生誕の地と刻んだ、こけの生えた碑もたっているのです。

俊達は、寛政二年1790年に生まれ、大村純昌公（おおむら・すみよし・こう）に侍医（じい）として仕え、二十石をもらっていました。大層穏やかな人でしたが、目は人を射るように鋭く、耳には三寸からある長い毛が生えていたそうです。大層学問好きで、藩の学校の五教館（ごきょうかん）の先生もしていましたが、この頃招かれて、豊後から来た広瀬淡窓（ひろせ・たんそう）とも大の仲良しでありました。

もう歳が五十才にもなってからのことです。あるとき、前野良沢（まえの・りょうたく）と、杉田玄白（すぎた・げんぱく）が二人で、オランダの本を我が国の言葉に直してつくった「解体新書」という本を読んでびっくりしました。これは、人間の身体が図によって、いろいろと詳しく書かれていたのです。

「われわれ医者も、中国から伝わった漢方ばかりに頼ってはあぶない。どうしても進んだヨーロッパの医術を知らなければならぬ」と強く思いました。

そこで、まずオランダ語を学ぶために、自分の養子で、江戸に勉強にやっていた忠庵（ちゅうあん）を、わざわざ大村に呼び寄せました。

二人は、薄暗い行灯の明かりの前に、机を並べ、一心に、オランダの本を読み出したのです。しかし、その頃、我が国は外国に対して国を閉ざしていた頃です。「俊達はけしからん。禁じてあるオランダの本や医法を調べている」といわれ、お役目は取り上げられてしまいました。

家はすっかり貧しくなってしまったのです。二人は外に出るときは、羽織がないので、一枚の羽織を親子で代わる代わる着て歩くという有様でした。しかし、俊達は、すこしもかまわず、オランダ語の辞書を買うときは、家に伝わっている大切な品物も売り払って金に換え、それで辞書を買い求めました。こうしているうちに、忠庵はあまりの勉強が身体にさわって、三十五才の若さでなくなってしまいました。

その後のことです。純昌公（じゅんしょうこう）のお子様が俄に病気になって、身体にむくみが出て苦しみました。侍医たちもすっかりさじを投げてしまったので、しかたなく、俊達に診せることになりました。

枯れ葉オランダ医法によって、回虫であることがわかりました。

そこで薬を持って、すっかり下してしまったので、再び御殿へも出られるようになりました。

その頃、大村領内に、天然痘がはやって死人が出てきました。その頃、疱瘡（ほうそう）にかかると、人に移らないように山の中に担ぎ込んで、中国から伝わった人痘種痘（じんとう・しゅとう）といって、鼻から薬を吸い込ませ、百日も二百日も山の中におくという乱暴なやり方でした。

俊達は、早くから牛痘種痘を広めたいと思って、うちに牛を二匹飼っていろいろ調べていました。ちょうどこの頃、長崎に楢林創建がいて、オランダの医者のモーニッケから、西洋の牛痘種痘をならって、ひろめていましたので、彼はさっそくその種を求めて、大村の疱瘡にかかっている人に受け付けました。

これで領内の疱瘡はすっかりよくなってしまったので、純昌公は喜んで、俊達に五石を増やして、二十五石与えることにしました。

忠庵がなくなったので、孫の専斎に思いをかけて、「おまえはワシのあとをついで、オランダの言葉を学び、西洋の医法を調べよ」と言い聞かせ、大阪の緒方洪庵塾に入れました。こうして安政二年1855年なくなりましたが、死ぬまで、オランダの本を話しませんでした。

「衛生局長」

専斎が緒方塾に入ったのは十六才のときでした。ここは日本一の蘭学塾で、生徒は全国からあつまり、仙人を超えていました。十七才になったある日、大村から俊達のなくなった知らせがあったのです。

「ああ、私は大事な祖父の死に目にあうことができなかった。不孝これにこしたことはない」と、布団をかぶって、毎日泣いていると、このとき心から慰めてくれたのは、友達の福沢諭吉でした。

「いっそう、勉強して、おじいさんの恩に報いたまえ」と励まされ、それから専斎は少しの時間の無駄もせず励んだので、ついに、諭吉について、緒方塾の塾頭を命ぜられるほどになりました。

この頃長崎に、ポンペという名高いオランダの医者がきたという噂が伝わりました。洪庵先生は専斎を膝近く呼んで、「君は、医学を志しているようだから、早く長崎に行って、ポンペ先生の実際の教えを受けたほうがよい」と勧めました。そこで、長崎にきて、精得館（せいとくかん）に入りました。ここは学校と病院を一緒にしたようなところで、医学を教えながら、病人の治療も取り扱っているところでした。

大村では、彼が近くの長崎に来たことを知って、殿様から「早く大村に帰ってきて俊達の跡を継ぐように」と言われました。専斎が困っていると、ちょうどこの頃、殿様が、狩りに出て、流れ弾が足に当たって、大怪我をされました。これを治療した侍医の手違いから、傷はだんだん重くなって、専斎に再び「大村に来て、殿様のお怪我をみるように」という知らせを聞いて、大村へ行ってさっそく、殿様の怪我を治してしまいましたので、殿様もおどろいて、「しばらく長崎にいてつとめたようがよい」と許しが出ました。

専斎は、ついてに精得館の館長を命じられました。この時、オランダ人のマンスフェルトという人は、「長崎には、たくさんの日本人が医術を学ぶためにやってくるが、みな薬のもり方をはやく覚えて、ひとかどの西洋医のような顔をして帰るのはよくない。医学のもとになる、理化学や生理学、動植物学から学ばなければならない」といっていました。これから、学校の仕組みもすっかり新ためてしまいました。

この間に明治の新しい時代は始まりました。岩倉具視はじめ政府の主だった人々は、アメリカやヨーロッパの進んだ文明を見て廻って我が国に取り入れることにしました。大久保利通、木戸孝允など、新日本を担ってたつ人はみんないっしょでした。専斎も、ヨーロッパの進んだ医学を調べるため、これに加わっていくことになりました。

一行ははじめアメリカに渡ったのですが、間には、一行には頭にちょんまげを結っていた人もあって、大層めずらしがられたそうです。アメリカから大西洋をわたり、ヨーロッパにつき、いよいよ医学の本場ドイツに行って、専斎は非常に感心したことがありました。それは病人を治すよりも、まず、「国民の身体を強くし、病気にかからぬようにする」という、国の仕組みがいかにも整っていることでした。それには、国中を清潔にして、衛生

を重んじなければならぬと思ったのです。この衛生という言葉も、彼が初めて使った言葉でした。

　かえってから、衛生局長になると、外国船かがそのまま我が国に入っていたのを、港外で調べて、伝染病の病人を入れないようにする検疫を始めたり、いろいろ国のため、立派な働きをしました。

　号を松香（しょうこう）といい、書道や漢詩も上手でした。子供の又郎（またろう）は父の跡を継ぎ、帝国大学の医学部の先生となり、のちには帝大総長にのぼりました。三男の善郎（よしろう）は小説家となって、有名な「青銅のキリスト」という物語を書きました。

第四話　　「西洋砲術の父　高島秋帆（たかしま・しゅうはん）」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

江戸中の人が、まだ呑気に太平の夢をむさぼっていた天保一二年のことです。

江戸の町のはずれの徳丸が原（とくまるがはら）で、大砲四門をなれべ、百人あまりの兵隊が、これをドンドンと撃ち出しました。これが、我が国で行われた西洋式の戦争の仕方のはじめで、これを指図したのが、我が長崎の高島秋帆でした。これまで、これほど激しい大砲の響きを聞いたことがなかったので、天下の人々はみな肝をつぶしたのでした。

彼は寛政（かんせい）十年八月十五日の生まれで、普通の名は四郎大夫（しろうだゆう）で、秋帆はその号でした。

高島家は代々町年寄で、また、鉄砲方を勤めていて、特に、父親の四郎兵衛は、萩流の砲術の名人といわれていました。

文化十年には、父親の跡を継いで、町年寄となりました。町年寄というのは、長崎奉行をたすけて、町中を取り締まる役で、そのころなかなか勢力が強かったものでした。

この頃、東洋の雲行きは、しだいに険しくなってきました。文化五年には、わが長崎の港に、不意にイギリスの汽船フェートン号が入り込んできました。表向きは、薪や水が欲しいというのでしたが、実はオランダがフランスのナポレオンに攻められて、弱っているのにつけ込んで、我が出島を乗っ取って、我が国に勢力を受け付ける足場にしようと思ったのでした。

この時、奉行の松平図書（ずしょ）は、これを追い払うため呼び寄せた、福岡の黒田藩や、大村藩の兵が早く来なかったので、責任をとって自殺してしまいました。

そこで、徳川幕府も、文政八年になって、ようやく、外国船打払令という命令を国中に出しました。

秋帆は幕府のこの生ぬるい態度に飽き足らず、「我が国は進んで西洋の砲術を取り入れ、国の守りをかためなければならぬ」という意見を、手紙にかいて幕府に差し出しました。

また、自分でもジャワからわたってきた、出島のカピタンの「デ・ヒレニューヘ」という人について、すすんだヨーロッパの砲術や、戦争の仕方についていろいろ教えを受けていました。

また、小島（こしま）の自分の家には、財産を投げ出して、ゲーベル銃や、臼砲（きゅうほう）を買い込み、また、西洋の砲術のことを書いた本「泰西火攻全書」（たいせいかこうぜんしょ）を翻訳して、出版したりもしました。

天保十一年には、「我が国の兵器も、もっと改良せねばならぬ」ことを書いて、長崎奉行所に差し出しました。

幕府もすこし目覚めたのでしょう。秋帆に、「江戸に来るように」命じました。そこで、翌十二年の正月、百人あまりの門弟に、大砲四門を引かせ、東海道を歩いて、江戸に上っていきました。

そうして、徳丸が原で、幕府の老中をはじめたくさんの役人や見物人のいる前で、大砲を撃って、西洋式の戦争の仕方をやって見せたのです。

老中阿部正弘（あべまさひろ）は感心して、「火技中興洋兵開基」（西洋の砲術をはじめて我が国に導入した人物）と書いて、秋帆に与えました。

ちょうどこのとき、中国ではアヘン戦争がおこっており、イギリスや、フランスの軍が攻め込み、その勢力圏を広げていました。

伊豆の韮山（にらやま）の代官、江川太郎左衛門はすすんで秋帆の弟子になり、また、薩摩、佐賀、土佐などの目覚めた藩からは、たくさんの藩士が長崎に送られ、秋帆に西洋砲術を学ぶことになりました。

やがて、秋帆は与力（よりき）という役にすすみ、長崎会所にも勤めることになりました。また、砲術や兵学を調べるために、外国のいろいろの兵器や、弾薬などを集めました。また、あるときは、長崎港に船を浮かべ、大砲を積み込み、田上（たがみ）の合戦場（かっせんば）にも、弟子を並べて、海陸で、ドンドン大砲をならして、戦（いくさ）の仕方の訓練をして、町の人を驚かせたこともありました。

この頃は、悪いことに、天保の飢饉といって、全国に米のとれない年が続き、飢え死にする者も出てくる始末でした。そこで、秋帆は、しばしば、飢饉の年の政治のやり方などについて、長崎奉行に意見を申し出ました。

また、弟子の池辺吉太郎（いけべ・きちたろう）を米所の肥後にやって、数百俵の米を買い込ませて倉に入れておき、困った人々を救う準備をしていました。

しかし、何時の時代にも、人の成功をねたむ人々や、進んだ考えに反対する者はあるものです。前から、秋帆のこのような進歩的な仕方をこころよく思っていなかった、保守派の人々は、「秋帆は自分の家にたくさんの兵器や、兵糧を蓄えて謀反を企てようとしている」とか「彼は密貿易をして大もうけして、外国人を通じて、我が国を売ろうとしている」など、言いふらしはじめました。かねてから、煙たがっていた幕府の役人は、さっそく秋帆を捕らえさせて、江戸の牢屋に入れてしまいました。財産はみんな取り上げられ、門人たちもみな罰せられることになりました。

江川太郎左衛門は、驚いて、いくども許されるように幕府に頼みましたけれども、正義が影を潜めていた頃だったので、なかなか許されませんでした。そこで、牢屋に食べ物を送ったりして、いつもなぎさめました。こうして、秋帆は、むなしく、十年間を牢屋で送ったのであります。

このうちに時勢は、次第に険しくなり、嘉永六年には、アメリカのペリーが軍艦四艘をつれて、浦賀にあらわれました。

太平のねむりをさます蒸気船　たった四杯でよるもねられず

これは、この頃の幕府のあわて方を、うまくあざけってよんだ川柳です。やがて、長崎港にもロシアの使いのプチャーチンが軍艦を引き連れてやってきて、開国をせまりました。いよいよ、秋帆の言っていたことが、本当であったことが分かったのです。そこで、幕府はあわてて、牢屋から出すことにしました。

このとき、もう、彼は五六才で、髪には白髪が交じっていました。

太郎左衛門は、よろこんで自分の屋敷内に、わざわざ新しく一部屋を作りました。秋帆をここに招き、上座に据えて、酒を用意してもてなしました。ある弟子が、「高島流砲術も、十年の間に、だいぶん変わった。いまは江川流と改めては」というと、太郎左衛門は

怒って、「秋帆先生の恩を忘れるようなものは、私の門人にいないはずだ」としかりつけました。

秋帆は砲術の稽古が始まると、草鞋ばきで鉄砲をかつぎ、兵の間に交じって、十年間離れていた技を取り戻そうと励みました。幕府は太郎左衛門とともに、秋帆を「海防御用取扱」に命じました。そこで、二人は安房の国、相模の国の海岸をめぐり、また、品川の海上に、台場を三つも築いて、その上には堡塁（ほうるい）を作って、大砲を備え、江戸の守りをかためました。

安政四年には「講武所砲術指南役」（こうぶしょ・ほうじゅつしなんやく）に進み、文久三年には、「海陸御備御用役」（かいりくおんそなえごようがかり）と、武具奉行を兼ねることになりました。

こうして、慶応二年正月十四日、江戸でなくなってしまいました。ときに六十九才でした。

秋帆は書が巧みで、それもその性格をよく著した大字が上手でした。好んで「孫呉甲越皆糟粕」（ごぞんこうえ・みな・そうはく）という文字を書いていましたが、これは、「昔から、中国の孫子や呉子、我が国の甲州の武田信玄や、越後の上杉謙信は、兵法の名人といわれているが、私の調べた、西洋砲術からみれば、こけおどしで全く、とるにたりない」という意味です。

長崎の小島（こしま）の先生の家は、まえに鍋かぶり山とよばれる愛宕山を望み、景色のよいところです。ここには桜の間や、雨声楼（うせいろう）という立派な部屋もあって、ここで先生は、たくさんの弟子を教えていたのです。

鉄砲を撃つ的にしていたので、弾丸の跡が残っている板石や、古い塀などは今でも残っていて、昔を偲ばせます。

第五話　「マルコ・ドロ神父」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「漁場（ぎょば）のクルス」

目の前には、ひろびろたる紺色の潮をたたえた外海（そとめ）の海を眺め、緑の段々畑が続いている西彼杵の黒崎の村は、赤煉瓦づくりの大・天主堂がそびえ、朝夕アンジェラスの鐘が、村を流れる平和境です。日曜日になると、子供やおばあさんたちまで、仕事を休み、胸にクルスを下げて教会堂のミサに集うのです。

ここは長崎県でも、もっとも盛んなキリスト教の村とされています。

この地方は芋がとれるほか、産業はわりあいに少なく、土地もやせている、むしろ貧しい村でした。

それでは、どうしてこのような平和な村が生まれたか、それは、マルコ・ドロ神父のなみなみならぬ努力の種子（しゅし）がこぼれ、いまや美しく実を結んでいるからです。

マルコ・マリア・ドロ神父は、1840年、フランスのカルワドス県のオースロールに生まれました。もともと、貴族の家柄だったので、父親はあの忌まわしいフランス革命に関係しました。そうして、騒乱が終わってからも、貴族の人々が、毎日殺されたり、職を奪われて落ちぶれ、パリの町をさまよっているのを見たのです。そこで、

人は何か手に職をつけていなければ食うに困ることがある。大切なことは職を覚えることと、働くことが好きななることだ。と思って、小さいときからマルコにも家庭教師を雇って学問を教え、また、厳格に「自分のことは自分でする」という習慣をつけさせました。少し大きくなって、パリの神学校に入ってからは、「私は、神に仕えることを一生の仕事にしよう」と、心に誓うようになりました。

外国の人は、宗教のためならば、遠く海を渡って知らない土地にいっても、神の福音を伝えるのです。若くて理想と望みに燃えていたマルコ・マリャは、プチジャン司教が伝道するために、インペラトリウス号に乗って、遠く東洋の日本へ渡るということを聞いて、自分から進んで連れて行ってもらうことにしました。そうして、長崎についたのが、明治元年1866年の桜咲く四月でした。

しかし、その頃も、長崎はキリスト教信者たちを捕らえて罰していたころで、浦上の信者たちは捕らえられ、九州をはじめ、とおく四国、中国の21藩に分かれて、追いやられているときでした。そこで、しばらく、横浜に滞在していました。

明治六年になると、キリスト教禁令がとかれ、許されて信者たちも、ぼつぼつと、なつかしい浦上の故郷に帰ってくるようになったので、自分もまた横浜から帰ってきたのです。そうして、まづ、お祈りに使う「祈祷書」の印刷を始めました。

あるとき「浦上くづれ」の人々が、山越えして、西彼杵の黒崎方面へたくさん落ち延びて、住んでいることを聞きました。彼は親友のサルモンとともに、ある日、細い海岸道づたいに、黒崎まで来てみたのです。

緑に覆われた丘、目にしみるような海の色、まづ、景色にうたれ、胸にクルスをかけて渚に、地引き網をひき子供を見て、「この黒崎こそ、神の教えをひろめ、神の御国（みくに）を打ち立てるところ」と、心に叫んだのす。

しかし、浜辺の村々をまわってみると、藁葺きの傾いた家、荒れ果てた道路、一見、いかにも貧しの者が多いということが分かりました。

まづ、仕事を教え、産業を豊かにしてやらねば、村の人々に幸福は訪れない・・・、彼はこう思ったのです。そこで、説教や、洗礼はサルモン神父にまかせ、自分は出津（しゅっつ）の橋口に一棟の工場を作りました。そうして、長崎から職人を呼び寄せて、イタリアうどんのマカロニの作り方、海で使う網のすき方などを、青年たちに教え始めました。

また、婦人のためには、修道場（しゅうどうじょう）を作りました。ここでは、着物の染色の方法、病人の看護の仕方、薬局も設けて薬のまぜあわせ方なども教え、実際の村の病人もとりあつかわせました。もとより長崎から医者もやとってきたのです。

はじめは、青い目の妙な異人さんたちと、冷たい目で見ていた村の人々も、だんだん、ドロ神父たちの真心がわかって、たくさんの村人が集まってくるようになりました。赤煉瓦の救助院も作って、ここには親のない貧しい孤児たちを入れました。

「五島のカンコロ」

こうしてドロ神父は、まったく村の人たちと溶け合って、生活を続けました。明治十七年頃になってから、もっとも力を注いだのは、荒れ地の開墾でした。「このような狭い、畑では村はやっていけない」と、人々を促し、西出津の湾の裏側の二町ほどの林に、鋤と鍬をいれて、挑みました。こうして新しい広い段々畑ができたのです。斜面の一部には、作物や農具を入れる倉庫も建てました。

ドロ神父は、毎朝、一番早く畑に現れました。寒い潮風の吹き渡る二月の麦畑に肥料をやるときも、自分から桶を担いで、上ってきた救助院の少女たちが笑って顔をそむけつめたそうにしていると、「おまえたちが、王様のお姫様だったら、家に帰って御殿でおやすみなさい。そうでなかったら、働いて、身体を温めた方がよい」といって、肥やしをかけてまわりました。幼い時、人は働かねばならぬ、と父親に教えられたことを、自分でも守り、人々にも教えたのです。

畑でとれた麦は、製粉所を作って粉にしました。これは小川に水車をかけて、麦をつくようにしたものです。粉はパンにしました。こうして村の人々はパンを食べることを覚えたのです。

明治二十四年の夏にはどうしたものか外海地方には赤痢が大流行して、この村にも患者が、日々多くなって、村の人々は怯えました。ドロ神父は、いち早く横道にバラック建ての避病院（ひびょう・いん）を作り、ここには、患者用のベッドを五，六十も用意しました。たちまち、ベッドはふさがったのです。便器もたくさん用意して、とくに、消毒に気をつけさせました。

ドロ神父は、火になんべんとなく、ここへきて、病人をみてまわってあるきました。ある日のこと、あやまって、患者の便をわしづかみして、「ほい、これはしまった。石炭酸はどこにあったかね」と叫んで、皆に笑われたりもしました。

明治三十年には、梅雨の時期に雨がふらずに、おまけに夏になって、激しい日照りが続きました。そこで、秋になっても米がとれず農家は困ってしまいました。

それに県道の大修理のために、どの家からも出て働くように、県からのお達しがあったのです。村の人々は働きに出ても弁当を入れる米がないので、大根の葉をかわかし、これに海からとった海藻をまぜ、こくわずかの米をいれて、おかゆをつくり、すすっている有様でした。神父は、気の毒におもって、五島からたくさんのカンコロを買い入れて、安くみんなにわけてやりました。

また、まづしい人たちには、製粉所でついた麦の粉に野菜を入れて煮て食べさせることにしました。入れ物を抱えて、朝早くから門前にたつ人々に、神父は、ニコニコ笑いながら、わけてやったのです。

やがて、外海地方の信者たちの力は集まって、赤い煉瓦建ての立派な天主堂もできあがりました。

こうして1918年大正七年十一月七日、三十五年間の神父の奮闘生活の幕は閉じました。ときに七四才でした。村人たちは、東出津の共同墓地に、この立派な魂を埋めました。今でも、神父の墓所を訪れると、かならず信者のたむける清く赤い花は、かぐわしい香りを放っているのです。

第六話　「おいもをひろめた人々」「井樋（いび）のどろがんどん、松本四郎左衛門」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「甘薯を広めた人々」

俗に、九里より旨い十八里・・・といわれ、芋はおいしくもあるし、その上、お米の代わりにもなるので、むかしから、我が国中のいたるところで、もてはやされていました

東京の洗足池のほとりには、青木昆陽という学者の墓があって、この人は、「おいもの先生」と呼ばれています。それは、もっとも早く芋の苗を取り寄せ、幕府の薬園に植えて、江戸地方に甘薯をひろめたからです。また、山陰地方にも、井戸平左衛門という人のことを「芋代官」と呼んでいます。これは、やはり、痩せたあの地方に、お米代わりに芋を作らせたからでしょう。

鹿児島では、元禄十一年に、南の方の琉球王が、殿様に芋の苗を献上したので領内に植えました。芋のことをサツマイモと呼ぶのは、これからおこったことです。そこで、鹿児島では、これをわが国における甘薯の始まりと言っていますが、実はこれよりも八十三年も前、昆陽先生の甘薯栽培よりも百二十年も前に、芋を植えたのは、実に我が長崎県の平戸の川内（かわち）でした。

ここは鄭成功の生まれた千里が浜の北に当たるところです。

その頃、平戸には、たくさんの外国船が入港して繁盛し、立派なイギリス商館もたっていました。この頃の商館長はコックスという人でした。慶長十九年の頃です。

有名な三浦按針ことアダムスを船長とするイギリス船は、たくさんの日本商品を積んで、シャムに向けて出帆しました。ところが、とちゅうに、大風が吹いて船内が水浸しになりいたんだので、修理のために、琉球の那覇港に船を寄せました。ところが、あるとき、食卓の上に丸いおいしいものを山のように出されたので食べてみると、ほっぺたの落ちるほどおいしいのです。アダムスが名前を聞くと「いも」と答え、窓の外を指さすので畑を見ると、たくさん植えてあるのです。そこで、アダムスはさっそくこれを買いとり、よく元和（げんな）六年五月、平戸へもって帰りました。

そして、この時、一俵のおいもを、商館長のコックスに分けてやったのです。コックスはこれはおかしのようにおいしいと喜び、これを川内（かわち）浦に植えたのでした。

これが、我が国に、甘薯の植えられたはじめです。川内地方は、土地が砂地で、甘薯にはもっとも適していました。その頃、平戸に来ていた外人たちは、みな、お菓子の代わりに、これを食べていました。植え方も、他所と違って、トンボ植えというので、いまもこの地方はこの植え方で植えられているのです。

お米のとれない対馬で芋をひろめた人は、陶山訥庵（とうやま・とつあん）先生です。先生は芋のことを「孝行芋」と呼んでいました。それはあるとき、貧しい百姓が山から芋を掘ってきて、親に食べさせていたからです。原田三郎右衛門（はらだ・さぶろうえもん）という人を、わざわざ、薩摩の国までやって、種を求めさせました。その頃、薩摩は、国を閉じて他所（よそ）の藩の人は、いっさい国に入れなかったので、三郎右衛門（さぶろうえもん）は、大層苦心して、この国に忍び込み、種をもってきたのでした。

長崎県内でも、五島地方は暖かく、もっとも芋・甘薯（かんしょ）の栽培には、土地があっているので、早くから一番広く作られました。けれども、どうしたものか、早く腐ってしまって長く蓄えておけないのが欠点でした。

富江藩の名君と言われた運龍公（うんりゅうこう）のときのことです。田中庄三郎（たなか・しょうざぶろう）という人が、富江に住んでいて、どうかして、甘薯を長く蓄えておくやり方はないだろうか・・・と、寝ても覚めても、心をくだいていました。あるとき知り合いの田原伝吉（たはら・でんきち）という人が、鹿児島から種芋を取り寄せて、植えたのが、なかなか腐らなかったという話を聞きました。

そこで、さっそく、それを自分の畑に分けてもらって、それから、家の床下の穴を掘って入れたり、日当たりのよい木陰に「いもがま」を掘ったりして、蓄えるやり方を工夫しました。芋は冬になってもくさらず、翌年の植え付けの頃までも、よく残っていました。庄三郎さんは自分の工夫の仕方を五島中に広めたのです。明治十六年1883年の十月、八十一才でなくなりましたが、富江の大蓮寺（だいれんじ）のお墓には、詳しく刻み込まれています。

「松本四郎左衛門」

長崎県は土地が狭いわりに、住んでいる人が大層多いのです。それに、お米のとれる田んぼも少ないので、海や湖を埋めて、田や畑を作る干拓の仕事は、昔から大層苦心して行われていました。

とくに、有明湾は、日本中でも、潮の干満が一番激しいところで、汐がひくと、見渡す限り広い干潟ができるのです。そこで、干拓には最も具合がよく、今できている森山地方の三ッ島干拓は、森山の向こうの三島を切り崩して、海の中に堤防を作り、海水をせき止めて新しい土地を作ろうというものです。

いよいよ汐留（しおどめ）もおわりましたので、四百町歩の新しい土地ができて、一万二千石のお米や野菜などのできる日も近づいてきました。このあたりを歩いてみると、田や畑の土は、がた土（がたつち）で、もとは海であったことを物語っています。

そこで、江の浦の井樋（いび）の口弁天（くちべんてん）さまは、ここいらを苦心して埋め立てた、松本四郎左衛門さんの手柄を記念して建てられたものです。

むかし、江の浦の今の開（ひら）きの一帯は、深く千々石湾の海が入り込んでいて、ここには大きな湖がありました。

「こんなに田地が狭くては、百姓はとてもやっていけない。幸いあの湖は底が浅く、船も入らないカラ、あれをせき止めたら、田地になるかもしれない」

こう目をつけたのは諫早藩に仕えていた松本四郎左衛門さんでした。この人は侍ながら、その頃、お金持ちという評判がありました。

そこで、さっそく人を集めて仕事にかかりました。今の下釜と船津の間の一番狭い井樋（いび）の口に、包みを築きはじめたのです。しかし、千々石湾は、波が荒く、少し風が吹くと、大波が押し寄せて、できかかった堤は跡形もなく、崩れてしまいました。そうして、これを幾度も繰り返したのです。

「あはは、また堤が消えてしもうた。あの波の荒か、海の中で、堤ができるはずはなか」

「あの湖を田圃（たんぼ）になすっちゅうのが、だいいち、よくばりすぎるとよ。はは・・・」

こう悪口を言って、四郎左衛門さんの家の前を、村の人々が通りました。人夫（にんぷ）たちが、海岸で働いていると、子供までが、

「井樋（いび）のどろがんどんな、立烏帽子　また働けば、ぬりなおせ」

と歌を歌って、はやし立てました。

こうなると、人夫もがっかりして、一人減り、二人減り、作業場は火の消えたように寂しくなりました。

しかし、四郎左衛門さんは歯を食いしばって、「一度始めたことは、あくまで、やりとおさねばならぬ。これも世のため人のためだ」と、

今度はやり方を変えることにしました。「下釜の東の方の横津（よこつ）の鼻（はな）に、まづ防波堤を築いて、海の波を食い止めてみよう」と思ったのです。

しかし、このときは、度々の失敗のため、お金はもう使い果たし、家や屋敷までも、人手に渡っていました。そこで、親戚や、知り合いの人々を訪ねて、訳を話してお金を集め、また、人を集め始めました。

ところが、「七転び八起き」で、今度は見事に防波堤ができたのです。

この防波堤で、千々石湾の荒波は食い止められ、井樋の口も無事にせき止めが終わりました。

四郎左衛門さんは涙を流して、人夫たちにお礼を言いました。やがて、ひろい湖は、みるみる、百五六十町歩（ちょうぶ）の新しい田圃（たんぼ）に変わっていきました。

そうして、五，六千石もお米がとれるようになったのです。これから、ここいらには、人家もぞくぞくと並んで、人々は、朝夕の美しい江の浦湾を眺めながら、たのしい生活をするようになりました。

元禄十一年になってから、この大工事を祝い、四郎左衛門さんの苦労を、後々の代に伝えるためにできたのが、はじめにお話しした井樋の口弁天ということです。

第七話　「二十六聖人」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「イスパニアの船」

　ＮＨＫ長崎放送局の高いアンテナのそびえる上の、西坂の丘は、港を見晴らす美しい公園になっていて、ここに二十六聖人の高い塔が空高くたっています。この丘は、むかし、キリスト教信者が、二十六人も磔（はりつけ）にあわれた跡になります。ここは遠いところからのたくさんの信者の方々のお詣りが行われて続けています。
　慶長元年の暑い盛りの八月のことでした。四国の南の高知城下の沖合に、見慣れない一艘の外国船が現れました。これはイスパニアのサンフェリベ号という船で、商売のために太平洋を横切って、メキシコまで行く途中、嵐に遭って、船が壊れていました。土佐の殿様の長宗我部元親（ちょうそかべ・もとちか）は、二百艘の伝馬船（てんません）をだして、サンフェリベ号に近づかせ、潮が満ちるときに、海岸の砂の上に引き上げさせました。
　船に乗っていた人はみんなで二百三十五人だったので、海岸に小屋を建てて、その中で休ませました。船長は、マチアス・ランデチョという人で、七人のキリスト教の宣教師も乗っていました。
　「船の修理を頼まねばならぬ、太閤様にお会いしよう」
　宣教師たちは、小舟を雇って、大阪城に向かいました。しかし、この時秀吉は宣教師たちに会わず、代わりに取り調べのため増田長盛（ますだ・ながもり）を高知にくだずことにしました。長盛は二百人の兵を連れてきました。
　長盛はランデチョにあって、
　「イスパニア人はポルトガル人と同じか」と聞くと、彼らは手を横に振って
　「いや、ポルトガル人は商売が上手だが、イスパニア人は戦争が上手い国民だ」と答えました。
　「東インドやフィリピンをとったのは、おまえの国か」と聞くと
　ランデチョは、一枚の地図を机の上に出して、「そうだ、我が国王は、まづその土地にたくさんの宣教師を送り、天主の福音を説き、人民をてなづけておいて、その後に、兵隊を送って土地をとってしまう。イスパニア国の領土はこのように広い」と、指で示しました。
　長盛は驚いて、このことを、大阪の秀吉に伝えました。秀吉は火のように怒って、サンフェリベ号に積んであった、木綿や繻子（しゅす）、白糸などの積荷を全て長盛に取り上げさせ、大阪・京都付近に住んでいる天主教の信者を残らずとらえよ、と命令しました。
　まづ、大阪では、宣教師のマルチン・アスンションをはじめ、三木・パウロなど日本人六名が捕らえられました。京都には石田三成がいて、神父ペトロ・バブチスタやフランシスコ・ブランコなど、イスパニア人五名と、日本人十二名をとらえて、牢に入れました。

秀吉は、「キリシタンはとらえたら、鼻と耳をそいでしまえ」といいつけましたが、三成は耳だけを切り落としました。牢屋で血にまみれながらも、信者たちは、「私たちが、あこがれの天の国へのぼる日がちかづいた」と、励まし合いました。

「この者たちは、我が国にとどまり、天主教をひろむ、よって、長崎にて、磔刑（たっけい）にするものなり」このような、立て札を持たせ、三四人づつ車に乗せて、京都の町を引き回しました。

長崎生まれのアントニオにはまだ十三才でしたが、十二才になるルドビコ茨木（いばらき）とともに、同じ車に乗っていました。二人とも耳を切られて、血が滴っていましたが、顔には少しの曇りもなく、美しい声で賛美歌を歌って過ぎました。これをみて、かわいさに涙を落とさない者はありませんでした。

こうして一同は大阪に帰され、みずれふる冬空に、いよいよ中国筋を歩いて九州へ下ることになりました。

「十三才のアントニオ」

道ばたの木の葉もカラカラと風におちて、粉雪が降り出しました。みんなの草鞋（わらじ）はちぎれてしまって、足跡は梅の花のように赤く血で染まり、着物もぼろぼろになってしまいました。途中で、

「とうか私たちも、殉教の仲間に入れてください」と、二人の若い者が願い出てきたので、この二人を入れて、みんなで二十六人になりました。

長崎の西坂の丘は海岸にも近く、かのキリストが殺されたカルパリヨの丘にも似た小高い丘で、後ろには山をおい、まえには、紺色の港が、名画のようにひらけています。

この丘の真ん中に、四歩づつ隔て、二十六本の十字架が立てられました。間に小型のもの二本は、アントニオと茨木の二少年用のものです。

二月五日の夜が明けると、たくさんの信者、見物人、守備の兵隊たちが、ぞろぞろと丘の上に上っていきました。

大村湾は船で渡り、時津に上陸した二十六の人たちは、ぞろぞろとここにひかれて上ってきました。

バブチスタ神父をはじめ、六人の宣教師を中心に、十人ずつ別れて十字架に縛り付けられました。

この時、港の漁船から一人の青年が海を泳いできて、手桶一杯の水をたたえ、柄杓（ひしゃく）に一杯ずつ水を飲ませました。

見物人の中にいた、アントニオの母親は、大声に我が子の名前を呼びました。一人の役人は、アントニオの傍らに近づいて、「おまえはまだ若い。今日の殉教は思いとどまれ。父母はおまえをたのしみにしている」というと、アントニオは、十字架の上から、お母さんのところに数珠を投げて、

「お母さん、私は長い間あこがれていた天国へ行くのです。どうか私の幸福を妨げないでください」と叫びました。そうして、かたわらに、十字架にかけられている、バブチスタ神父に、

「神父よ、神の喜びをたたえましょう」というと、神父は天を向いて目をつむりお祈りをしているので、一人で美しい声で、賛美歌を歌い、胸を二本の槍で突き刺されました。

あちらこちらに、赤いしぶきがほとばしりました。

パウロ・三木は「我が魂は、いまや天にかえる」と、人々にお終い（おしまい）の説教をしました。かれは織田信長の家来で、もっとも有名な説教者でした。

人々は「わっ」と叫んで、十字架に近づき、あらそって、手拭いやハンカチに血を受けました。

「殉教者の血を受けると、かならず、その人は幸福になれる」と信じられていたからです。

パウロ・三木たちの血を、一人のイタリアの兵隊が帽子で受けて帰りましたが、これは二ヶ月も暖かだったといわれています。

これから、毎週、処刑のあった金曜日の夜になると、西坂の丘の上には不思議がおこって、長崎の人々をおどろかせました。

この丘の上から、五色の夕焼けのような美しい色がさっと差して、空一杯をあかあかと焦がしたからです。

二十六人の人たちは、1627年になって、ローマ法皇コルバル八世によって、聖人の中に加えられました。

第八話　「汗の尊さ　中山要左衛門（なかやま・ようざえもん）」と「有馬晴信（ありま・はるのぶ）」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「中山要左衛門」

島原駅の付近の青々と稲の茂っている田圃あたりを土地の人は「三好新田」とよんでいます。

むかし、ここら一帯は一面の海だったものを、 中山要左衛門という人が、開いたものです。 要左衛門の家は商売上の呼び名・屋号を三好屋といっていたので、田圃にもこのような名がついたのであります。広さは十四町歩からあるのです。

雨の降る日も、風の吹く日も、きまって朝早く起きて、冷たい水をかぶり、身体を清め、海岸の猛島神社（たけしまじんじゃ）にお詣りにいく少年がありました。

これが若い頃の要左衛門さんの姿でした。十八歳の時のことです。「伊勢の大神宮様にお詣りしよう」というので、島原を発って大阪まで来ると、「雲仙岳がにわかに火を噴き出してくずれ、島原は火の海になっている」という噂を耳にしました。驚いて引き返して、島原までくると、どうでしょう、眉山が二つにさけて、だらだらとくづれて、海上にはみたこともない赤茶けた島がいくつも横たわっていました。もとより村の家々は溶岩の下敷きになってしまっていました。

要左衛門さんの家など跡形もなく、家族や親戚もちりじりになってしまっていました、

しばらくの間、呆然と気を失って、焼け跡に突っ立っていた要左衛門さんは、やがて、「これではいかぬ」と気を引き締めて、元の土地にバラック建ての小屋を作りました。そうして、すこしはなれた北目（きため）あたりの田地を調べにいってみると、幸い十町（じゅっちょう）ほども残っていたので、「これをもとでにして、商売を始めよう」と決心しました。そうして、その田地を売りはらい、そのお金で、新しい商売を始めました。

要左衛門さんは、他所の内が、まだ寝ている頃から店を開き、また、夜は遅くまで店を開いて働きました。そこで、身代（しんだい）は、次第に増えてきました。すこし儲けると、そのお金で田地を買っていきましたが、しまいには、その田地が増えて、百六十町歩という広さになり、島原領内では、一番の金持ちになってしまいました。

天保年間になると、あの有名な、飢饉がこの領内も襲いました。嵐や日照りが長く続いて、一粒もお米がとれなくなったのです。人々は食べ物に困り、ここらでも三千人からの飢え死するほど困った人々ができたのです。島原の殿様も、かねてから藩のお蔵に蓄えていた米を出して、飢え死にしそうな人々に、与えましたけれども、とてもこれだけではたりません。

「要左衛門さんのうちの蔵の米を出してもらおうじゃないか・・・あの金持ちだから・・・・」

人々はこう言い出しました。

さっそく藩の役人が、要左衛門さんの家に行くと、しばらく腕を組んで考えていましたが、どうしても、首を縦に振りません。

「けちな男だ」「金（かね）の番人だ。鬼のような男だ」と人々は口々にののしって、家の前まで行くと石を投げつけて帰りました。けれども、要左衛門さんは、黙って目をつむっているばかりでした。

そののち、再び、役人が家を訪れると、

「それでは、お城の大手に下に続いているあの浜の埋め立てを、私にやらせてくださらんか。人々をその仕事に使わせてもらいます」といいました。

そこで、そのことを役人から殿様に申し出ると、さっそくお許しがくだりました。

要左衛門さんは、鍬や、鋤、もっこなどの道具をそろえて、人夫の募集にかかりました。ときに、天保八年1837年の三月の事でした。

「年寄りでも、女でも子供でもよい。働ける人はみな働きなさい。お給金は差別をつけません」

要左衛門さんは、こう言いました。人々は続々集まってきました。そうして、朝早くから、もっこで土を海岸に運んだり、堤防を築いたりして、一生懸命働きました。その頃の藩の給金は、達者で働き盛りの男の人で一日三匁（もんめ）が決まりでしたが、要左衛門さんは女、年寄り、子供まで差別なく、三匁三分（さんもんめ・さんぶ）を与えたのです。

人々は感激して、夕日が有明海にかすんで沈むまで働きました。こうして仕事はみるみるはかどり、翌年の夏には、七町三段という新しい埋め立て地ができたのです。暮らしに困っていたたくさんの人々も、すっかりこれで、すくわれたのです。

埋め立て地の一部は塩田にして塩を作り、残りは田圃にしてしまいました。

「人はタダで物を与えれば、それがなくなるとまた欲しがる。なまけ心がよくない。汗の尊さを知らせなければならぬ」

要左衛門さんはこう思っていたのでした。嘉永四年頃になると、この埋め立て地もすっかりよい田地になって、藩へ上納米さえ納めるようになりました。時の殿様の忠晴（ただはる）公は、要左衛門さんの子供を節に取り立ててやりました。

「有馬晴信」

「原城の主」

「私の家は、もとはこの島原半島ばかりではない、藤津、杵島（きじま）の二つの郡も領し、二十四万石の太守（たいしゅ）であった。敵（かたき）の龍造寺（りゅうぞうじ）を討って、どうかして、もとのような大きな国にしたいものだ」

若い晴信は、青空に浮かぶ白雲を眺めては、いつもこうつぶやいていました。その頃、彼は南有馬の原城にいたのです。

兄の義純（よしずみ）が、早死にしましたので、天正五年1577年、わずか十一歳で、父の後を継ぐことになったのです。

この頃は、すでに、口之津港には、ポルトガル船が入って、南蛮の珍しい物を入れ、それとともにキリスト教の宣教師がが、続々入ってきたので、天主教は領内に広く行き渡っていました。晴信も早くから洗礼を受けて、教名（きょうめい）をドン・プロタジオと名乗りました。

宣教師ワーニヤニのすすめで、天正十年、イタリアのローマに、少年の宗教使節を送ることになりました。そこで、大村純忠、豊後の大友宗麟と相談し、自分の甥の千々石清左衛門（ちじわ・きよざえもん）など13，14才の四名の少年を旅立たせることにしました。正月三十日、イスパニアの船、イニャス・リマ号に乗って、あこがれのヨーロッパを目指し、少年たちは胸を膨らませて長崎の港を出帆したのです。

かくて、かれらは、荒波のインド洋を渡り、三カ年の月日を費やして、イタリアの都ローマにたどりつきました。ローマの人々は、道にバラの花をまいて迎え、ローマ法皇グレゴリオ十三世は、少年たちを抱き上げて喜びました。

晴信は、「敵（かたき）の龍造寺を討つには、薩摩の島津と結ばねばならぬ」と思って、島津義久（しまづ・よしひさ）と連絡して、密かに時の来るのを、伺っていました。

佐賀の龍造寺隆信も、その頃鳴り響いた豪傑でしたから、黙ってはいません。天正十二年の桜咲く頃、五万七千の大軍を引き連れて、半島へ押しかけてきました。晴信は南有馬をたって、島原の今の春岳城（はるたけじょう）あたりに出てきました。兵数わずかに五千です。

おりよく義久も、約束に違わず、三千の兵をひきいて、有明海を横切って半島に上陸しました。

両軍は、すすんでひろびろたる沖田畷（おきた・なわて）に、にらみ合って陣をしきました。隆信は身体があまりにも太っていましたので、山駕籠にのって軍を指図していました。小高い丘の上にかかったので、駕籠から降りて、床几（しょうぎ）に腰を下ろしながら、敵陣を見渡しました。旗指物や兵の数があまり少ないので「あれしきの兵か」と顔に少し侮りの色を浮かべました。するとこのとき、ふいに、丘の下のほうから、兵が隆信の側に斬りかかってきたので、「こしゃくな」と、太刀を引き抜き、二、三人その場に切り倒してしまいました。

このときです。目の前に、黒色おどしの鎧に身を固めた、雲を突くような大男が現れました。

「わたしは、島津の家臣川上左京（かわかみ・さきょう）です。殿の首級（みしるし）をいただきにまいりました」といって、鋭く切りつけました。左京はもとは隆信の家来で、「島津の内情を探ろう」と薩摩に入り込んでいたものを、隆信は敵に降参したものと疑って、留守の間に、妻や子供を、殺してしまったのでした。恨みの刃するどく、隆信は首を取られてしまいました。

「黒船征伐」

こうして、晴信は、しだいに旧領を回復することができました。秀吉の朝鮮征伐のときは、小西行長の部下となって、一族とともに、百隻の軍船に兵を乗せて朝鮮に渡りました。特別に、兵の服装や、規律もよいといということで、全軍の評判となりました。家康が天下をとると、直ぐに江戸城へご機嫌伺いに上りました。

この頃、家康は、安南（あんなん）に産するという伽羅（きゃら）という香（こう）を欲しがっていました。晴信はこのことを聞いて、さっそく探して献上すると、非常に喜んで、長崎奉行の長谷川藤広（はせがわ・ふじひろ）に、いま少したくさん用立てるようにと命じました。藤広は困って、晴信にこのことを相談しました。晴信は、「それでは使い

を安南にやって、もとめさせましょう」と答えました。家康からは、銀子（ぎんす）六十貫と、安南への土産として、みごとな鎧・金屏風が届きました。

晴信は南蛮の帰化人で、船乗りの、九兵衛（きゅうべい）という者に、六人を手下を連れさせ、家康からの土産物をもたせて、安南に向け出帆させました。この船が、途中、アマカワについていたときのことです。

六人の水夫どもが、この港の守備のポルトガルの兵隊と喧嘩して、相手を溝の中に五，六人投げ込んでかえってきました。その夜の夜更けがた、九兵衛の泊まっている旅館へ、六，七十人のポルトガルの水兵がだしぬけに押しかけてきました。そして、六人の者を殺し、国王への土産物をみな奪って逃げてしまいました。九兵衛一人だけは、闇の中に飛び出し、もともと中国に住んでいたことのある男ですから、どんどん、奥地に逃げ出し、やっとのことで長崎へ帰ってきました。

晴信はこの九兵衛を連れて、その頃家康のいた駿府へのぼり、大老の本多正純を通じて、このおもむきを報告しました。家康は、火のように怒って、「その南蛮船が、長崎へ入港してきたら、必ず、討ち取れ」と命じました。

その年の十月、一隻の南蛮船が長崎へ入港してきました。よく調べてみると、たしかにアマカワにいたポルトガル船マドレ・デウス号で船長は、アンドレート・ベッソアというアマカワの守備司令官でした。たくさんの生糸を積み込んで貿易に来たのです。

この知らせがあると、晴信はさっそｓく、有馬から兵を長崎にくだしました。藤広と相談して、「ベッソアを生け捕りにしてやろう」と思いました。そこで、相談があるから、奉行所へきてもらいたい、と使いをやりました。ベッソアは、すこし不思議に思って、市内にいたポルトガルの宣教師たちに事情を調べさせました。兵が集まっていることや、様子がおかしいというので、デウス号は、はやくも帆をまいて、出帆の支度をはじめました。

そうして高鉾（たかほこ）まで出かけましたが、にわかに風が吹き出したので、また港内に引き返してきました。晴信はたくさんの漁船にに枯れ葉を山のように積んで、火を放ち、デウス号に近づけました。

焼き沈めようという計略でしたが、漁船は途中で燃えて沈んでしまいました。

十五反の帆を張る船を二つつなぎ合わせ、その上にイスパニア船と同じまでの櫓をつくり、兵を乗り込ませて、いよいよ、敵船に殴り込みをかけることにしました。この夜、晴信は小舟を港に浮かべて、兵を指図しました。デウス号は、夕方頃から、港外へ出ましたが、また、風が強いため引き返してきました。

炭を流したような真っ暗な夜です。わが小船は、しずしずと、デウス号に近づいていきました。例の櫓船は、デウス号すれすれのところまでくると、兵は鍵を引っかけて、どんどん乗り込みました。長谷川角兵衛（はせがわ・かどべい）、高橋主水（たかはし・もんど）、久能（くのう）善右ヱ門とみな粒ぞろいの融資たちです。ベッソアは剣を抜いて指揮しました。砲手はドンドン大砲を撃ち出し、敵の水兵たちは、船室の影に隠れてピストルを撃ちました。

闇の中に、パッツパッと火花が散って、わが小船は焼けて沈んだりしました。

そのうちに、デウス号の船底に、大音響がおこって、俄に左に傾きはじめました。火薬庫に火がついたのです。

「それっ」というので、我が兵は、自分の櫓船の乗り移りました。ベッソアは水中に落ちて波の上に漂っていましたが、弾丸（たま）があたって、海に沈んでしまいました。長崎の港口の神ノ島に近い海底にこのデウス号が、たくさんの銀塊をいたいたまま沈んでいるというので、いまでも引き上げようという計画が企てられることがあります。

晴信は、このように勇気のある人でした。けれども、あるとき、家来の岡本大八という者に、「殿様は、長崎奉行の長谷川藤広を暗殺しようと、たくらんでいる」と訴えられて、気の毒なことに、甲斐国にお国替えになってしまいました。そうして、その地で、切腹を仰せつかってしまいました。ときに、四十六歳でした。

第九回　「大村彦右衛門」「浜田謹吾（はまだきんご）」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「大村彦右衛門、泣き柱」

八重桜で名高い大村公園は、もとの大村城趾で、いまでも城は立派に残っていますが、これを築いたのは、大村家中興の祖といわれる大村喜前（おおむら・よしあき）公でした。この善前公（よしあきこう）の跡嫁いだ純頼（すみより）は、わずか三年でなくなりました。まだ二十八歳の若さの上、この頃は領内にキリシタンが押さえつけられていた頃だったので、これを恨んだキリシタンに毒殺されたのではないかとの噂が飛んだほどでした。そうして、一子松千代（まつちよ）は、わづか二歳の赤ん坊だったのです。

領内は、俄に雲がかぶさったように暗くなってきました。

「はて、困ったものだ、先君がなくなられて、跡付きの君が、おさないときは家は断絶、領地は没収とは、幕府のきつい掟だが」と家臣はみな困り抜いていました。

このとき「どうかして、大村家が続くようにせねばならぬ」と、立ち上がったのが家老の大村彦右衛門でした。

彼は彦次郎と名乗った少年の頃から、優れた知恵をあらわしています。天正十四年まだ十八歳のときのことです。長与村の地頭の長与純一というものがそこの浜城にたてこもって背いたことがありました。これを征伐に行ったのが大村純常（すみつね）です。五十人ばかりの兵を引き連れて、夜討ちにかかりましたが、なにぶん九月の半ばの暑さで、みなのどがカラカラに渇いて困りました。このとき誰かが、「梅干し、梅干し、梅干し」と大声に叫んで駆けていくのです。これを聞いて皆は、おもわず、つばをグッと飲み込んで進んだので、敵の砦を難なく落とすことが出来ました。この「梅干し、梅干し」と叫んだのが、彦次郎だったのです。

朝鮮の役には旗本として、喜前公に従い、大村勢を引き連れて出陣し、また、関ヶ原の戦には、石田三成のはかりごとを見破って、家康に味方しました。戦がおわると、いち早く家康に面会して、無事大村領を保つことができました。純忠が名高いキリシタン大名だったので、その子の喜前が、まだキリスト教を信仰していないかと、幕府が疑いをかけられたときでも、領内のキリシタン寺を焼き払って、疑いをときました。

しかしさすがの彼も、今度ばかりは、腕を組み考え込みました。その頃、よその国にも、跡継ぎが幼かったため藩は潰され、侍は浪人しているところがあったのです。

「この上は、幼君を抱いて、江戸へ上り、直々に、大老にお願いするよりほかにない」彦右衛門が、こう心に決めいると、時も時、大切な松千代が病気になってしまいました。「しまった。時期が遅れると、いよいよ面倒なことになる」と思いながら、城中から自分の家に帰ってきました。部屋に入ると、まだ生まれたばかりの赤ん坊の亀千代が、すやすやと布団にくるまって眠っています。

彦右衛門はその寝顔をしばらくじっと見ていましたが、やがて、なにごとか心を決した様子で、次の仏間にいって、お灯明を上げました。そうして目をつむって、「どうか大

村六万の領民のために我が君の病を治させたまへ、跡目、相続の願いが、叶いました暁には、亀千代の一命をも、ささげます」とお祈りしました。

その願いの甲斐があったか、いよいよ江戸へ出立の日になると、松千代の病も軽くなりました。

そこで幼君とともに、富永四郎左衛門、松浦左近、の二人をつれて上ることにしました。ときに、天和（てんわ）六年の正月二十一日、雨風の強い日でした。

江戸へ着くと、翌日は直ぐに江戸城に登って、老中の本多上野介（こうずけのすけ）、酒井雅楽頭（うたのかみ）に、願い出ましたが「天下の掟は曲げられぬ」と、なかなか、聞き届けそうにもありません。

そのうえに、急に「大阪城城普請」（おおさかじょう・しろぶしん）の命令が大村藩に下ったのです。「大阪城の修理は、いままでは六万石以上の大名に限っていた。二万七千石の大村の小藩に命ぜれれるとは、弱り目に祟り目だ」と思ったけれども、いさぎよくお受けすることにして、松浦左近を、いぞぎ大村へ下らせました。

かねてから、仲が悪かった平戸の松浦家からは、「わずか二歳ではものの役にたちますまい。どこからか養子を迎えられては」と勧めてきました。養子を迎えると、領土は他家のものになるに決まっているのです。

こうしているうちに、空しく半年はたってしまいました。しかし、彦右衛門も、辛抱強く江戸に頑張って、あらゆる手立てで願いを続けていました。

ある日のことです。きょうも幼君を抱いて老中部屋に現れた彦右衛門は、頭を下げて願いの筋をのべながら、時々、松千代の着物に手を入れておしりをつねりました。松千代は大きな声で泣き出します。

「これ泣かすな。やかましい」

「幼君もこのように、せつない思いでおられます。お許しが出るまでは、彦右衛門この座を立ち去りません」と柱に寄りかかり座ったままで夜を明かしました。今のストライキの座り込み戦術です。

これには老中も困り果ててしまいました。これが評判となって、この柱は彦右衛門の泣き柱と呼ばれるようになりました。

五月十五日のことです。

江戸城西の丸に参れ、という、お達しがありました。彦右衛門が例のように、松千代君（まつちよぎみ）を抱いて登城（とじょう）しますと、大老酒井雅楽頭、老中土井大炊頭（どい・おおいのかみ）その他たくさんの幕閣立ち会いのうえに、「大村家は旧家であるうえに、先君喜前公おおやけに対して功労すくなからず、これを思し召して松千代幼少なれど相続を差し許す、彦右衛門は、これが後見をせよ」と申し渡されました。これを聞いたときの彦右衛門の胸のうち、頬には涙さえ流れていました。

これが終わって、他の部屋に将軍秀忠様にお目にかかると、秀忠は、「おう、松千代、ふびんさよ」と言いながら、その頭を撫でて、頭にかぶる頭巾を賜り、彦右衛門には、紋付きの着物と、小袖が下りました。

大村の領内は一度に桜の花が開いたように明るくなりました。大阪城の修理も、家臣たちが銀二十匁ずつだしあって、滞りなく終わりました。大村城では、松千代君の跡目相続を祝って、竹松村の黒丸踊り等、たくさんの余興も出て、大賑わいの日が続きました。

しかし、この賑やかな日が、彦右衛門にとっては、もっとも悲しい日になりました。松千代君相続の日が、一子亀千代の満願の日だったのです。かれは、城内から帰るといつものように、仏間に灯火をあげ、すやすやと一室に寝ている亀千代の胸に刃を突き刺しました。そうして、「神仏にお願いした本願が成就した。亀千代許してくれ」と、涙ながらに抱き付きました。

かくして万治（まんじ）二年1659年の十一月九十歳をもって世を終えましたが、彼は実に、純忠から純信（ずみのぶ）まで四代に仕え、大村藩きっての大功臣で、仙台の伊達安芸（だて・あき）、福岡の栗山大膳（くりやま・だいぜん）とならび、天下の三家老と言われました。

大村前船津の丘の上には、父の彦右衛門の大きな墓の傍らに、「院号と亨保三年十二月十五日代死」と記された亀千代の墓がたっています。その入り口には、身代わり観音と呼ばれる観音様がたっていて、美しい花があげられているのです。

「少年鼓手　浜田謹吾（きんご）」

明治元年のことです。西郷隆盛と勝海舟の二人の江戸高輪屋敷での相談で、徳川氏の江戸城は無事に明け渡されました。そうして、天下を治める権力は、明治天皇の手に帰ってしまったのです。新しい明治時代の幕は切って下ろされました。けれどもこれで、収まらなかったのは、諸国の大名たちです。

特に、長い間徳川の恩になっていた東北の仙台、会津、庄内などの諸藩は、剣をとり、砲門を開いて、新政府に立ち向かったのです。この中にただ秋田藩だけは、政府方であったので、領内はすっかり賊軍に囲まれてしまいました。「秋田藩を救え」をいう声は国内のあちこちにおこって、救援隊は組織されだしました。大村の台山公（だいざんこう）（すみひろ）は、もとより勤王派でさっそく奥州征伐の兵を繰り出しました。ときに、明治元年六月大村の兵は続々奥州にのりこんで、平潟（ひらかた）、泉（いずみ）と、各地に勇ましく戦いました。しかし、敵はなかなか強く、砲隊長の淵山規矩藏（ふちやま・きくぞう）は、負傷するありさまでした。「兵の数が足りません。どうか、いま少し兵を送ってください」と秋田から使いが来ました。「よし、救援隊を送ろう」と台山公は、希望者を募りました。

「お母さん、私を是非、秋田へやってください。私は、今日の日のため、毎日、練兵場で、進軍太鼓の稽古に励んでいたのです」こういって、きっと、お母さんの顔を見つめたのは、浜田謹吾少年でした。

「おお、謹吾。よく言ってくれました。おまえはまだ十五才だが、おまえのおじいさん（浜田弥兵衛）は、台湾に押し渡って、オランダ人を懲らしめたほどのお方です。どうか先祖の名を辱めないようにしてください」

「うれしい。きっと、私は、大人に負けぬ手柄をあらわします」謹吾は、つよい決心の色を眉の間にあらわしました。陣羽織、袴、草鞋、とお母さんは謹吾の支度をしてやりました。隊長は大村弥門（やもん）、軍監が深沢南八郎（ふかざわ・なんはちろう）、小隊長のなかには龍（りゅう）とあだ名された剣客の芝江運八郎（しばえ・うんはちろう）もいて、総勢は326名でした。

謹吾は勇ましい進軍鼓手となって、第二小隊付きとなりました。七月二七日新倉（にいくら）の波止場から船にのり、長崎に行って、ここから汽船のヒーロン号に乗り込み、日本海の荒波を超えて、羽前（はぜん）の船川（ふながわ）港にあがったのです。

賊軍の強い戦いぶりも、ぞくぞく聞こえてきました。特に、会津若松の鶴ヶ城は、松平容保（まつだいら・かたもり）が立てこもっていたので、政府軍はたくさんの兵を集めて、これに砲火を浴びせかけました。このとき先鋒（せんぽう）にあらわれて、強く抵抗したのは、いずれもいたいけな一五，六才の少年の白虎隊でした。官軍もこれを見てしばらく砲撃をやめたほどでした。

船川港にあがった大村兵は、すぐに、薩摩・長州の連合軍と連絡することができました。そうして、二小隊の泊まったのは、角館町（かくのだてまち）の平福（ひらふく）さんの家でした。この家は、後に、平福百穂という名高い画家の出られた家です。

「まあ、あの少年鼓手の勇ましいこと・・・」謹吾少年はたちまち町中の評判になって、見物するために人々が家に押しかけてくる始末でした。特にかわいがってくれたのは、ここの家のお母さんでした。

いよいよ合戦という前日になると、「今夜はたくさんご飯を食べておやすみなさい」と、こう言って、翌日の弁当も特別に用意してくれました。夜が明けると、暗いうちから、いよいよ刈和野（かりわの）に向かって出発することになりました。もう野原に虫の音もすだく、九月十五日です。

敵も今日を最後と、砲火を開いたので、撃ち出す弾丸は、あちこちに激しく破裂しました。この間を、味方は白刃（はくじん）をふるって進んで言ったのです。ドン　ドン　ド・ド・ドン、ドン　ドン　ド・ド・ドン、ドン　ドン　ド・ド・ドンと打つ、謹吾の太鼓の音はいつも先頭から勇ましく聞こえてきて、全軍の大村兵を、奮い立たせました。そのうちに、ふいにぱったり太鼓の響きが消えてしまいました。

「おお、謹吾が」側を進んでいた兵が、かけよって身体を抱きかかえました。「傷は浅い、謹吾さんしっかり気をもって」と言いながら、続いて駆けつけた軍医隊のものは、すぐ担架に乗せて、もとに平福さんの家までかえってきました。

「まあ、謹吾さんが、かわいそうに」この家のお母さんが、地に染まった着物を脱がせると、襟のうちには、次のような和歌が、縫い込まれていました。

ふたばより　てくれみずくれ　まつはなの　きみのおんためと　さけよこのとき

（双葉より手くれ水くれ待つ花の君の御ためと咲けよこの時）

これは謹吾が大村を発つとき、お母さんが人知れず縫い付けていた和歌で「おまえの幼い時から、大事に育てたのは、国のため立派な手柄をあらわさせるためです。どうか華々しい働きをしてください）という意味の歌です。

藩校の五教館で養成された大村魂は、根強くこのように一藩に培（つちか）われていました。このうたこそ、大村母性の心意気をあらわしたものとして、感激せぬものはいませんでした。この日の夕方、謹吾は、ついに目をつむってしまいました。この日の戦（いくさ）で、ほかに39名の負傷者が出ました。なくなったものは、この町の埋葬場に、手厚く葬られました。謹吾少年の墓の傍らには、そののち、あのお母さんの和歌を刻んだ歌碑た建てられ、いまでもこの町で大切に守られているのです。

大村市草場の招魂社にも、桜の木の下に、慎ましやかな墓が建っていて、「浜田謹吾藤原里俊（はまだきんご・ふじわらのさととし）霊」、後ろには、「明治元年九月十五日、羽州刈和野にて戦死。行年（ぎょうねん）一五才」と刻まれています。

第10回　「平戸の恩人　三浦按針」「雨森芳州」「賀島兵助」

⑤今回の本文の紹介
⑥朗読本文

「平戸の恩人　三浦按針、ウイリアム・アダムス」

平戸港の町に残っているオランダ塀や、オランダ井戸は、昔この港にそって、立派なオランダ商館が立ち並び、オランダ船が入港して、珍しいヨーロッパの産物を積み込んだなごりが残っています。

この頃の平戸は、我が国でもっともたくさんの外国船の入港した港で、大阪や堺の商人もこの町に集まってきて、非常な賑わいでありました。

このオランダ船入港や、オランダ商館を建てるのに、力を尽くしてくれた人、いわば平戸開港の恩人とも言うべき人が、イギリス人ウイリアム・アダムスです。

彼は、誠に男らしい一生を送った人でした。生まれたのはロンドンに近いギリムガという小さな村で、家は貧しい百姓でした。ちょうど、イギリスが朝日の昇るように栄えていた、エリザベス女王の時代でした。

幼い時から、テームズ川を走る大型船や、帆掛け船を見て暮らし、近所の造船所に通い始め、十年間ばかりも、こつこつ働いていましたが、そのうちに試験を受けて、航海士と船長の免状をとりました。

そうして、二十四歳になると、一時、オランダ独立軍に加わって働いていましたが、やがて、船長になって地中海を船で乗り回していました。

1598年のことです。オランダのロッテルダムから五隻の船で一艦隊を作って、南米を回り、東洋に向かうという、噂を聞きました。かねてから、東洋に行ってみたいとあこがれていたので、彼は自分から願い出て大按針（だいあんじん）つまり、舵取りの頭（かしら）となって、一行に加わったのであります。

艦隊長はマックス・マイホアという商人で、船には、綿布（めんぷ）や、麻布（まふ）をたくさん積み込み、乗組員は壱九八人でした。オランダ政府は、大砲を四門乗せることを許し、弾薬をたくさん貸してくれました。

六月二三日、艦隊はロッテルダム港を出帆しました。大西洋を横切ってマゼラン海峡に向かい進んだのですが、途中で、食料が段々亡くなってきたので、洋上に小さな島を見つけて、上陸しました。

すると、原住民かが手に手に槍を持って襲いかかってきました。鉄砲でこれを追い払い、掘っ立て小屋のような原住民の家のある村を占領しました。これはアボナ島という島でした。

ここに二ヶ月も住んで、よく1599年の四月六日には、夢にも描いていたマゼラン海峡をとおることができました。アダムスは、船の甲板（かんぱん）の上から、南米の陸（おか）に向かって手を上げて、「ばんざい」を叫びました。

しかし、暑さはひどく、波風は次第に荒れ狂ってきたので、一隻の船は、希望を失って、本国を指して引き返してしまいました。

パルパライソにむかった一隻は、むこうに着いてから、乗っていた者はイスパニア人に捕らえられてしまいました。

一隻は荒波に巻き込まれて沈没してしまい、アダムスの乗っていたリーフデ号のみは、やっとのことで、チリ国のバルデビヤにたどりつきました。ここから南緯三七度のところにあるというセントマリヤ島を目指して進むことになりました。

ようやく目的の島も近づいた洋上を走っていると、むこうの方に小さな島が浮いていて、海岸にたっている色の黒い原住民たちが手を上げて、「食料をやる」という合図をするのです。リーフデ号は、すっかり食料がなくなって、弱り切っていたところでしたから、食べ物をもらおうと、船長をはじめ、二三人の士官たちが鉄砲をもって、上陸しました。アダムスの弟のトーマス・アダムスも「兄さん、僕も行ってきますよ」と笑って下船しましたが、みんなが波打ち際を歩いていると、不意に森陰から毒槍（どくやり）ともった原住民たちが奇妙な声を上げて押し寄せて、士官たちを槍で突き殺してしまいました。船の甲板の上から、弟の殺される様子を見ていたアダムスはどうすることもできませんでした。

やっとのことで、船がセントマリヤ島にたどりついてみると、艦隊長の乗っていたホープ号がひっこりと到着しました。一同は肩をたたき合って喜び、ホープ号の甲板に集まって、会議を開きました。この一隊がはじめ目指していたのは、インドのマラッカでした。ところが、船員の中に、東洋のことに詳しい一人の水夫が射て、「マラッカは熱帯で、未開の土地だ。日本というところがある。ここは開けていて人も多い。あの国に行ったら、船に積んである毛布も売りさばくことができるだろう」と、言いました。

そこで、「では、日本に行こう」と、秋も末の、十一月二七日に、その島を出発しました。

ところが、またまた、たちまち大嵐に出会って、ホープ号は流され、マレー半島のチトール島に流れつき、ポルトガル人に襲われて五人は捕らえられ、その他の者は殺されてしまいました。

年も明けた1600年の四月十九日、アダムスの乗っていたリーフデ号ただ一隻、九州の豊後国（ぶんごのくに）の沖合に、流れ着いたのです。生き残った者はわずかに十八人、それの死人のように船の上に寝転んでいて、歩ける者はたった六人でした。

六人の者が、這うようにして上陸していくと、たくさんの野次馬が、ぞろぞろ見物に来ました。その中に一人のポルトガル人がいましたので、やっと言葉は通じました。この頃、我が国では、天下分け目の合戦（かっせん）といわれた関ヶ原の合戦がやっと終わって間もない頃で、家康はすでに大老となって、大阪城にいて天下を治める仕事をしていました。大分から、この漂流者についての報告を受けたので、ひとまず、そこの牢屋に入れておくように命じました。

やがて、十八名の者は江戸に呼び出されました。天下を取ったほどの家康は、やはり目が高く大政治家でした。この頃から、「我が国の人々は、海外の国々と貿易し、また、出稼ぎをして働かねばならない」と思っていましたので、五万両というお金を十八名のものに分け与えました。この金（かね）をもらって、江戸に留まり貿易商となったものもあり、平戸へ下って大砲を作る仕事を始めた者もありました。

家康は、このなかでも、特にアダムスの才知を認め、幕府に仕えさせようとしました。けれども、彼はイギリスに、妻のマリーが待っていて、その上、かわいい二人の子供まで

あったのです。しきりに帰りたがっていたので、奉行の馬込勘解（まごめ・かげゆ）というものの娘で、キリシタン信者をその嫁に世話し、江戸の伝馬町（てんまちょう）に家屋敷を与えて、住まわせることにしました。また、相模の逸見村（へんみむら）には、二五〇石の土地さえ与えたのです。

アダムスも、この家康の熱い心に感激して、いよいよ我が国に帰化して、名も三浦按針と改め、幕府に外国の有様（ありさま）を話したり、外国との外交や商売を指南する外交顧問という役についたのでした。

あるとき、家康の命令を受けて、百二〇トンの西洋型の帆掛け船を作りました。これに二三人の人を乗せて、太平洋を押し渡って、遠くメキシコのアカプルコまで航海させたりしました。

1609年慶長十四年、七月一日には、オランダ船が平戸へ入港してきました。かねがねから、海外貿易を考えていた、藩主の松浦法印公（まつら・ほういん・こう）は、これを喜んで迎え、いろいろもてなしましたが、前から、この町に来ていたポルトガル人とか、イギリス人はあまりこれを好みませんでした。

外交顧問の按針は、平戸へ乗り込んできて、このゴタゴタをさばき、まもなくオランダ商館ができあがりました。これが、実にこの後の平戸の繁栄のもとを築いたのでした。

やがて、按針のはからいで、イギリス商館もできあがりましたので、彼は宮ノ下に家を構え、江戸と、平戸の間を行き来することにしました。また、浦賀と、大阪、京都には代理店ももっていました。平戸の家にいるときは、イギリス国旗を軒端に出して印としていました。

按針はいつも大きな望みをいだいていました。あるとき、我が国の北海道から、ベーリング海峡をわたって、北アメリカのニューファンドランド島に通じる北海航路を作ることを勧めて、家康をびっくりさせたこともありました。貿易にためにシャム（現在のタイ）にも渡りました。こうして、ついに、1620年元和（げんな）六年五月十六日、平戸の土に帰っていったのでした。時に、五十七歳でした。外国人墓地には、立派な「三浦按針」の碑が建っていて、その手柄が刻み込まれています。

「雨森芳州（あめもり・ほうしゅう）」

徳川八代将軍吉宗公をたすけて天下の政治をとり、その頃、飛ぶ鳥も落とすと言われたほど、勢いの強かった新井白石が、あるとき朝鮮へやる手紙の中に、吉宗のことを、「日本国大君（たいくん）」と書いてあったことがありました。

これに対して、「白石（はくせき）は偽学者だ。我が国の大君は天皇のほかにない」と、攻撃をして、天下の人を驚かせたのが、雨森芳州（あめもり・ほうしゅう）でした。芳州は、対馬の宗家に仕えた、対馬学問の父といわれたほどの偉い人物でした。

父親は、清純（せんじゅん）といって、近江国（おうみのくに）の雨森村（あめもり・むら）の人。芳州も寛文（かんぶん）八年五月十七日、その地に生まれたのです。幼い時、「大きくなったら医者になろう」と思っていましたが、あるとき、伊勢の国の高森という、父親の友達が、家に遊びに来て、「書道の稽古をする者は、書き損じてもただ紙を費やすばかりだが、医者は間違うと、人の命を損なうことがある」と話しているのを聞いて、こ

れから、ブッツリ医者になることを諦めて、学者になろうと心に決めました。このときが、八歳だったといわれています。

もとより、家は貧しかったのですが、大きくなるにつれて、がくもんにたいする志（こころざし）は強く、ついに江戸に上って、木下順庵（きのした・じゅんあん）の弟子になりました。この頃、順庵先生は、江戸一番の偉い学者で、たくさんの優れた弟子がありました。中でも、前に述べた新井白石、室鳩巣（むろ・きゅうそう）など、十人の優れた人物がありましたが、そのなかでも、順庵先生は、「芳州が一番偉い」と、褒めていました。

その頃、対馬の宗家（そう・け）から、偉い学者を召し抱えたいと申し出があったので、順庵はさっそく芳州を勧めました。こうして、芳州先生は対馬に来るようになったのです。

その頃、対馬は、朝鮮に最も近いので、その使いが毎年やってきて、我が国でも、大切な場所のひとつとされていたのです。

芳州は二百石で召し抱えられることになりましたが、このとき二四歳でした。時の殿様は義真公（ぎしん・こう）でした。たくさんの対馬の藩士たちに学問を教えることと、毎年やってくる朝鮮の使者にあって、もてなしたりするのが役目でした。あるとき、「片善録」（へんぜんろく）という書き物をしたためて、義真公に差し出しましたが、これは貧しいこの藩の財政のやり方等に対する意見を、述べたものでした。

後に、長男の顕光（あきみつ）を学問させるため、わざわざ江戸に上らせて、荻生徂徠の門に入れましたが、わずか三ヶ月で対馬に引き取ってしまいました。「徂徠（そらい）は、心が清くして、なかなか、よい男だが、考えはまだ浮ついている。私の子供を預ける人物ではない」というのが、芳州先生の意見でした。

もともと、芳州は漢詩を最も得意としましたが、八一歳になってから、「和歌を作ろう」と志（こころざし）ました。そうして、二年の間に、古今集という、和歌の手本になる歌集を、千回も繰り返して読みました。まあ、三ヶ月の間に、和歌を一万首作ったほどの熱心さでした。そうして、寛延（かんえん）元年のめでたい三月三日の桃の節句には、

うちむれて　みちとせいわう　もものはな　うえのみのひに　めぐるさかずき

と詠んでいます。

これは、この節句をみな集まって祝うのはいかにもうれしい・・・・と、自分の長生きを喜んで詠んだものです。

こうして、宝暦（ほうれき）五年正月六日、八八歳まで生きてなくなりました。厳原（いずはら）の長寿院（ちょうじゅいん）に、葬られています。

「橘窓茶話」（きっそう・さわ）、「治要管見」（ちようかんけん）などたくさんの本を著し、多くの友達や弟子に取り巻かれていました。朝鮮語や、中国語にもなかなか達者でした。

ある人が、「あなたは、いろいろの国の言葉に通じておられますが、とくに、日本語がお上手のようです」と笑ったのは、有名な話です。

「立つ鳥の清さ、賀島兵助」

　対馬の北の端の仁田の村の伊奈の海岸には、一つの古い碑（いしぶみ）がたっていて、これには、

　立つ鳥の　跡の清さよ　麦畑

　という、句が刻まれています。

　この碑が建っている所こそ、ここでお話をしようとする賀島兵助（かしま・ひょうすけ）先生が、厳原から流されてきて、お住まいになった跡です。

　兵助は号（ごう）を恕軒（じょうけん）といい、正保（しょうほう）二年五月十二日厳原に生まれました。父親の仁左衛門（じんざえもん）は、はじめは、百姓でしたけれども、なかなかしっかりした人物でもあったので、殿様から認められて、侍にとりたてられ、藩に仕えていました。そこで、仁左衛門は、これに感じて、一生懸命に仕えていましたが、殿様の亡くなられた知らせを聞くと、一室に閉じこもり、腹を切って跡を追いました。この有様を見た妻のマツさんも、その場で黒髪を惜しげもなく落として尼となり、名も秋月尼（しゅうげつに）と改めて、一生夫の跡を弔ったのです。そうして、忘れ形見の兵助を、立派に育てることに力を注ぎました。

　このような立派な両親に育てられた兵助が、普通の少年と違っていたことは、いうまでもありません。大きくなって、対馬の殿様にお仕えするようになると、選ばれて九州本土の肥前の田代の役人として行くことになりました。対馬は、山の多いところで、米のとれる平地といへばわずか須佐村（すさ・むら）あたりに、すこしあるばかりです。だから、対馬十万石といっても、米のとれるところは、藩の飛び地であった田代あたりが、大部分でした。

　この領内でも大切な田代に兵助が行ってみますと、その頃、ここいら一帯、人気（じんき）が非常に荒んでいて、人はなまけて暮らし、博奕が盛んに行われていました。従って、お米の取れ高も悪く、百姓はみな貧しかったのです。米どころでありながら、この領内の借金は1098貫、また他所から借りていた米が6480俵もあって、全く首も回らないありさまでした。

　兵助はこの有様をみて、どうかして田代の村々を、立て直さなければならない、と思いました。

　そこで、百姓たちを自分の家に集めて、

　「ここに二斗の米があったとすると、これを一日に、一升ずつ食べると、二十日間で食べてしまい、十日間不足するので、みなが苦しまねばならぬ。これを辛抱して、一日七合ずつ食べてみよ。三十日はもつだろう。お金も、自分のもっているものの七，八分使って、三分は必ず貯蓄せよ。そうして家々の経済を図れ」と言って聞かせました。

　そして、博奕をやっている者を見つけると、これに厳しい罰を与え、朝早く起きて働くことを奨励しました。また、自分も早く起きて、朝露を踏みながら領内を廻り、百姓たちを励ましたのです。

　領内もようやく生気を取り戻し、百姓たちも見違えるように田圃に出て働くようになってきました。しかし、延宝（えんぽう）七年の夏の七月には、大雨が降り続いて、田圃や家々は水浸しになり、おまけに、悪いはやり病気まで村を襲ったのでした。やがて、田畑

（でんぱた）は流され、一家が病の床にふする悲惨な人々が村々に溢れました。そこで、兵助は、殿様に願い出て、これらの人々のために、参六〇石の米を藩の蔵から出してもらって、それを与え、また、薬がなくて死を待っているような人々に薬を与えました。これで、助かった人は実に、1800人にも及びました。悪いことは、よく続くものでよく延宝八年にも、また、大洪水が出ました。今度も藩の米を二百石だして、1400人からの人々を救いました。この二度の大水にこりて、川ふちには、十分な堤を築かせました。また、山に木を植えることを奨励し、畑には桑を植えさせて、蚕を飼うことを奨励しました。この効き目が現れて、領内はめきめきと豊かになってきました。この後、二年ばかりもたった天和（てんわ）元年のことです。幕府の巡検使（じゅんけんし）の奥田八郎左衛門が、江戸から下ってきました。この人は、その土地の政治向きの有様を調べる役人です。そのころ、巡検使が下ってくると、その土地の百姓たちには、その場を取り繕って、嘘を言わせる習慣となっていましたが、兵助は、「ありのままを答えよ」と言って、諭しておりました。

八郎左衛門は、くまなく田代領内を廻って、「百姓はまじめでよく働いている。実に感心な村だ。これは政治が立派に行き届いている結果に違いない」と、褒め称えました。貞享（じょうきょう）元年、十一年間の勤めを終えて対馬に帰ることになりました。領内の人々は親に離れるように別れを惜しみ、百五十石の米を対馬の殿様のお蔵に献上しました。

兵助が島に帰ると、七十石を与えられて、大監察（だいかんさつ）という役を仰せつかりました。

この役は藩の政治向きの有様を見て、殿様に意見を申し上げる役でした。どこの藩も長い間には、悪い習慣が積み重なって抜き差しならないようになるものです。兵助の目に映った藩の有様は、みだれて改革のいることばかりでした。そこで、彼は、国がよくなるようにと思って、三十二箇条の改革の意見書を殿様に差し上げました。これは後に、「賀島兵助言上書（ごんじょうしょ）」といわれた有名な書き物でした。

「ひとつ、人民の上に立つ侍は、自分から道徳を守れ、ふたつ　度を超えた役人の酒盛りは慎みたい、みっつ　なるべく租税をうすくして、百姓の負担をかるくせよ」といったことが、書いてありました。

喜ばなかったのは、家老をはじめ、よくない侍たちです。

たちまち、「兵助は余計なことを言う」「今のうちに兵助を除かねば、自分たちがどうなるかわからない」と、兵助の排斥にかかりました。

そして、気の毒にも役を奪われて、島の北の端の仁田のはづれに流されてしまいました。

その頃、厳原には、陶山訥庵（すえやま・ぼつあん）のような立派な人もあって、どうかして兵助を元の役につけようとしましたが、ついに成功しませんでした。

しかし、兵助は少しも殿様を恨むこと泣く、「いつか私の、真心が通じることがあろう」と神に祈りながら、毎日畑をたがやし、本を読んで日を過ごしました。そうして、この片田舎で暮らすこと十一年、元禄十年五月九日、この地で亡くなってしまいました。

このことが、田代の領民たちに分かると、みな親を失ったように嘆き、家々には兵助の画像を掲げて祀りました。また、百姓たちは集まって、「基肆養父実記」（きしようふ

じっき）という本を作り、荒れ果てた土地を、美田にした先生の手柄を書きしるしました。また、寛政（かんせい）六年には、領内の太田観音の境内に、立派な碑も建てたのです。

対馬藩では、その子孫には、録を与えることにしました。

文化年間になってから、家老の大森功久（おおもり・かつひさ）という人が、伊奈の先生の旧宅あとに、はじめにお話した「立つ鳥の」の碑を建てたのです。

戸田頼母（とだ・たのも）という人は、あるときこの碑をおとづれて、

立つ鳥の跡の清さをほめられし、なお、その人のいさおしぞ思う

立派な行いの人と、慕われているが、ほんとうに見事な業績をのこされたものだ・・・・と和歌を詠んで、その人がらを慕ったことでした。

⑨御礼
⑩エンディング
　ＮＯＣ長崎卸センター、NOCS長崎卸センターサービスがお届けいたしました。本文中、差別または差別的とみなされかねない表現がある可能性もありますが、著作者にはそのような意図がないことはもちろんであり、原文の芳醇な香りを残すべく、本文のままを原則としておりますが、原作が50年以上も前の作品であることを鑑み、原意を損なわない範囲で、一部省略または一部言い換えのうえ、朗読しております。ご了承いただきますようお願いいたっします。なお、ご意見・ご指摘はnocs@e064.comまで電子メールでお送りいただければ、その内容のご紹介を当社HPで行い、今後の配信の参考とさせていただきます。よろしくお願いいたします。では、次回シリーズもダウンロードお願いしたします。 ではでは、次回までしばらくの間、さようなら。歌の種でありたい、歌種の「やまだ眸月真」でした。

平成２４年９月４日
NOC協同組合長崎卸センター
NOCS長崎卸センターサービス株式会社